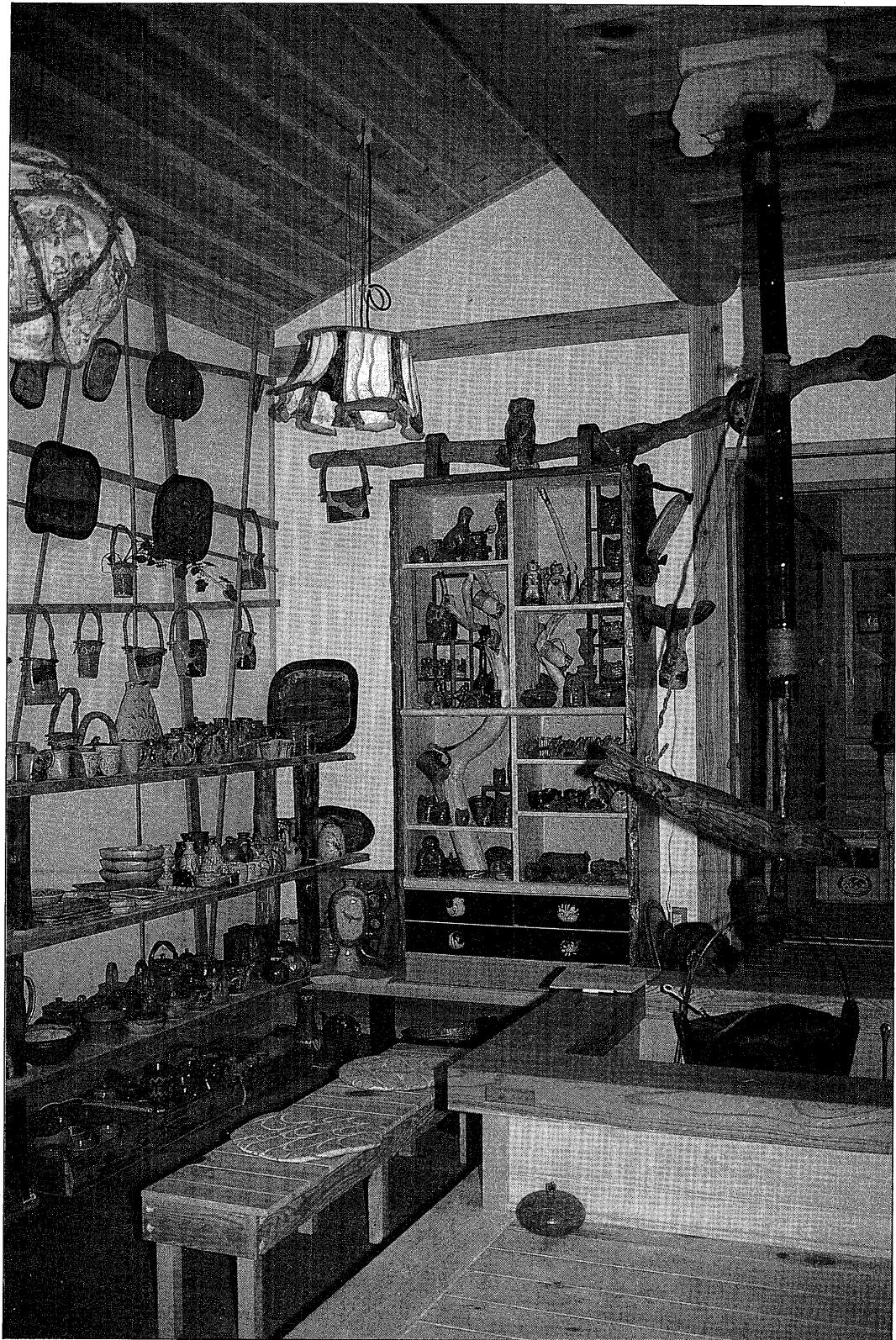


# 生活文化

VOL. 1



生活文化同人機閱誌創刊号



家族で陶芸や様々なクラフト作品を制作販売するアトリエとショップをともなったこの建物は、住み手の希望と予算もあって、ある種のセルフビルド的な部分を残し、素材としての建物を造るために、施工、木材、監理のそれぞれを同人のメンバーがお手伝いした。

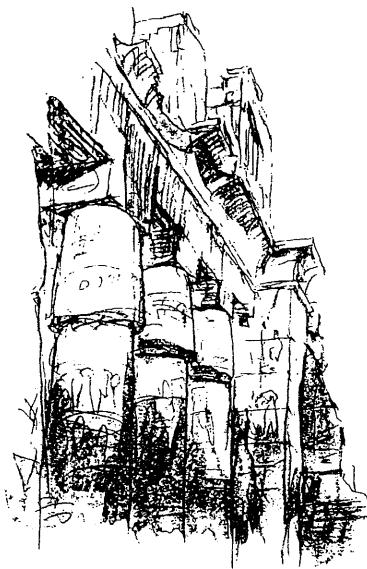
セルフビルトにもさまざまあり、全て住み手の作業によって造られるものからすれば、今回の建物では、全体の中で占める住み手の作業の割合は控え目かもしれない。

頭の堅い建築屋には思いもよらない、自由な発想と技によって創りだされた物たちは、アプローチからはじまり案内の隅々にまで及び、時に過剰という言葉を思わせるほどの饒舌さでそこにある。想像とは違い、中に入るとやわらかで不思議な居心地よさを感じるのは作者である住民たちの人柄が紡ぎだす雰囲気なのだろう。

小林一元

# 生活文化 創刊号

1996.4



昨日・今日・明日	吉田 桂二	.....	4
増田一眞さんの仕事	江原 幸壱	.....	24
遠藤新の住宅の分析	鈴木 久子	.....	38
旅の画帖	吉田 桂二	.....	50
住み継ぎ	日影 良孝	.....	52
奈良、山の辺の家	長谷川順持	.....	80
丸岡城の模型写真	藤谷 智史	.....	94
かわらミュージアム	吉田 桂二	.....	102
書評	益子 昇	.....	104
会員のページ	岡部 知子	.....	106
同人規約		.....	108
編集後記		.....	110

# 昨日・今日・明日

1995

吉田桂二

久しぶりに会った人などから、「近頃は何している?」と聞かれることがよくある。ご挨拶程度の言葉と思えば「まあ、相変わらずだよ」と答えれば済むが、本気になって答えようすると、何から何まで話そうとすれば、大変な長時間になる。これから書こうとするのは、つまりはこうした場合の返事なのである。

## 住まいづくり・個別性の中に普遍性を

このところ、発表してこなかったので、住宅作品が相当たまってきて、今年は「住宅建築」の5月号に5つ、6月号に6つ、まとめて発表した。5月号ではこれを「伝統構法に基づく架構デザインの展開」として、6月号では「空間の融合と変化・動くものの理論」としてまとめた。

住宅はそれぞれ、敷地条件も異なるし、発注者である住み手のニーズもまた異なるけれども、そうした与条件に適合するようにつくるなどということは当たり前のことに過ぎない。こうした区々たる与条件とは全く無縁と言い切ってしまっても過言ではないところに、大きな命題があるのだと思う。それを追ってゆくと、複数の作品に或る種の共通項が生じてくる。

それは多分、その建築家の作風ということになるだろうし、あるいはまた個性ということもできるだろうが、それは結果であって、決して命題ではない。個性だの作風だのを命題だと思っているような人達もいて、困った建物をつくっているが、命題というのは個人的なものではなく、建築が本来持つべき普遍的な内容でなければならぬ。

しかしこうした命題は、命題があらかじめあって個々の設計に取り組むわけではなく、個々の設計に取り組む中から見出だしていく筋合いのものだと思っ

てほしい。だから発表すべき 11 点の作品を並べてみて、これを命題 2 つにまとめるにすれば何が適切かを考えた。

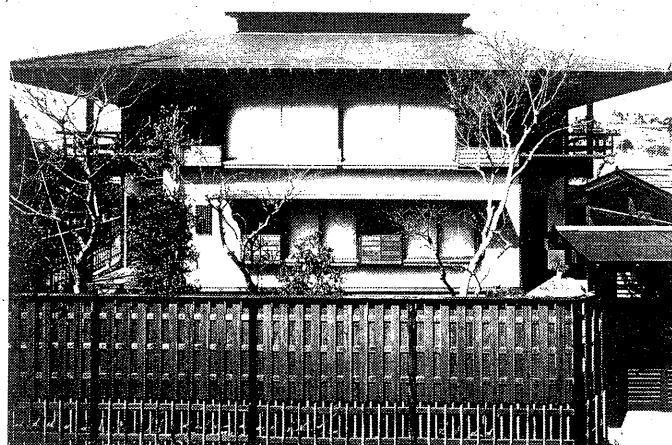
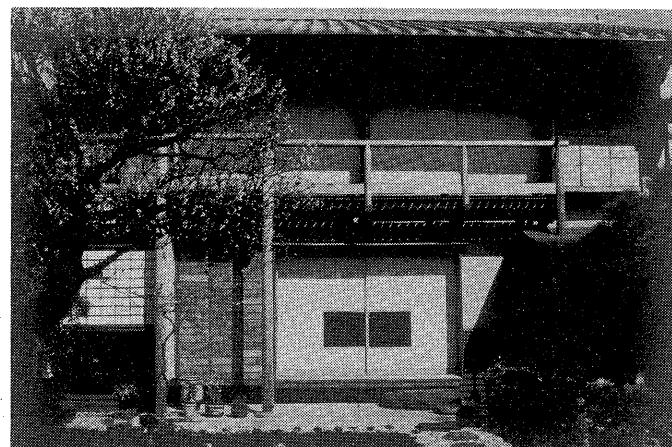
### ● 「架構」と「空間」で住まいの骨子がつくられる

1 つには木造の架構がある。木造にもいろいろあるから、伝統構法と注釈を付けた。架構が命題ではいささか陳腐だが、「建築知識」の 5 月号に架構デザインの長文の解説をしていて、伝統構法が新しい展開をするためには架構デザインの体系化が必要、と強く思っていたこともあって、同時に出ていた「住宅建築」の方はその事例になる、と考えたからだ。「建築知識」と「住宅建築」の両方に、「両方とも読むことをお勧めする」という異例の文章を掲載してもらった。

1 つの命題が架構なら、もう 1 つは間取りというのが順当だが、命題が間取りでは内容が区々たるものになってしまう。間取りで考えていることの共通項は、一口に言ってしまうと「広がり空間」、日本の風土と生活慣習に適合したものと考えているのだが、これを空間の装置としてとらえてみると「建具」が浮上してくれる。

しかし「建具」では命題が矮小化するので、これを内外空間、内々空間の融合と分割、或るいはまた性格を変化させるものと考え、「動くもの」というとらえ方をした。

もう少しましめな言葉はないかと考えたが、思い当たらないので、これでやって



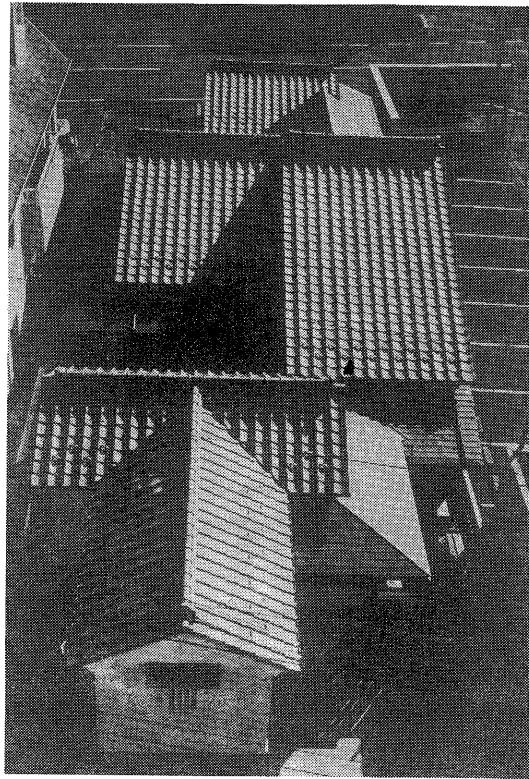
上・成増の家 下・藤沢の家

みることにしたが、「架構」と「動くもの」では言葉としてはセットにならないけれども、命題としては立派にこの2つで住まいを形づくることができるから、悪くないと思っている。

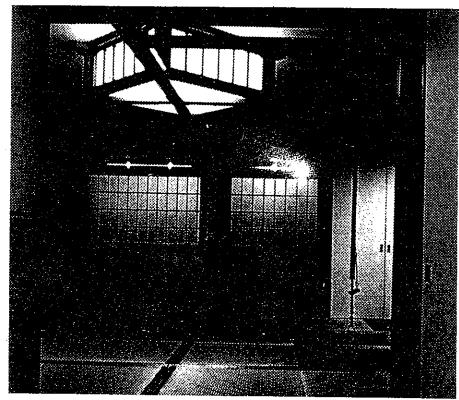
### ●架構デザインを体系として

グリッドをさまざまに動かしつつプランするグリッドプランニングの手法は、プランに一定のリズムを与えるけれども、それが目的ではなく、木造架構の形を定めながらプランすることに他ならない。同じ木造だとしても伝統構法ではなく、規格化された別の構法を採用するとすれば、グリッドプランニングの内容は違ってくる。伝統構法に基づくグリッドプランニングの手法は、伝統構法でつくられる空間のサイズが、生活空間のサイズと連動してつくられてきた経緯から、間取りに即対応する。ここが重要だと思う。RC造と比較してみればこのことは明白だ。

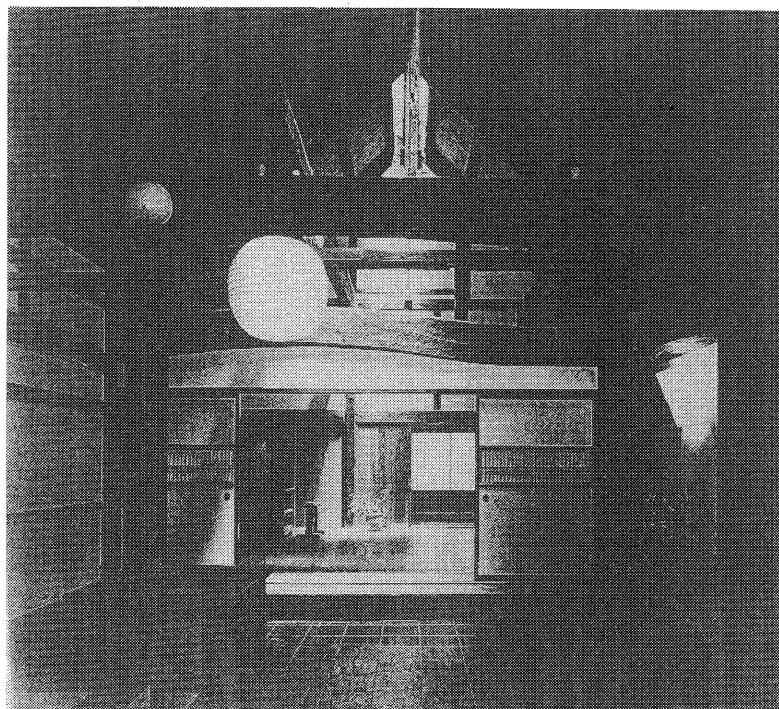
伝統構法を名人芸のような大工技術とか、特選された建築をつくる構法のように言うのは、高く評価しての誉め言葉のように聞こえるが、それは聳肩の引き倒しになる。伝統構法を巷から追放することに手を貸したことになる。伝統構法は決してそんな種類のものではなく、ごく一般的なものであったし、そうあらしめたい。伝統構法を間違った認識から立ち戻らせるには、プランニングと連動した体系が必要と考えての、架構グリッドプランニングの提唱



大垣の家



月心居



那須の家

とした。伝統構法の習得は、継手だ仕口だというような部分ではなく、まず全体の木組の如何から始めなければ、一般的な技術から遠ざかってしまう。

### ● 「動くもの」の理論は奥が深いようだ

空間の融合と分割を可能とする装置は、端的には建具。空間を広がりのあるものとすれば、ドア形式の建具は姿を消し、引戸が主体になってくる。引戸はレールさえあればどこまでも動いてゆくから、多様な展開が楽しめる。

「住宅建築」5月号は「架構」を命題に5点、6月号は「動くもの」を命題に6点の住宅を発表したが、これは「架構」、これは「動くもの」と明確に分別できるわけではなく、どれもどちらの見方もできるのだが、「動くもの」の中に1点、全く「架構」でもなく住宅でもない店舗「月心居」を加えた。

以前に福井で「無限定空間の家」というのをつくった。これは内部空間に柱を無くして、建具を自由に走らせて空間の融合分割を自在にしたもの。「月心居」はこれと同じようなつくりになっていて、空間の性格はこれによって取り仕切られている。「動くもの」の理論にぴったりの事例だと判断した。

しかし単に建具ではなく、「動くもの」という言葉を使ったのは、空間の融合と分割のみならず、建具の重ね使いや動くことでのデザインの変化など、空間

の性格を「動くこと」でガラリと変えてしまう点に注目したからだ。「月心居」で全く外部空間のない室内に変化を与えることを思ってつくり、気がついたのだが、以後、「大垣の家」「小金井の家」では意図的にこれを展開してみた。このテーマは奥が深そうで魅力的だから、これからもヨシズ戸なども使ってさらに展開させてみたい。

### ●民家再生も特殊なことではなくしたい。

「住宅建築」10月号には、坂本善三美術館と那須の家の2点を、民家再生の事例として発表した。前者については後でふれるが、後者は住宅だからここでふれておきたい。

端的に言うと、民家再生を腕まくりしてやる「保存」というような視点ではなく、ごく平易に通常の設計とあまり変わりなく考えたいということだ。那須の家は工事をしてくれた益子さんの力添えもあって、住金の新築住宅としての融資も受けることができたが、古材を使っても新築は新築だ。しかし新築住宅であっても伝統的形態が創作の底辺に存在するように、古材を組めばおのずと具体的な形でそれは存在する。特定の過去の人と語りあえるということだろう。

### ●住まいづくり・今の仕事、これからの仕事

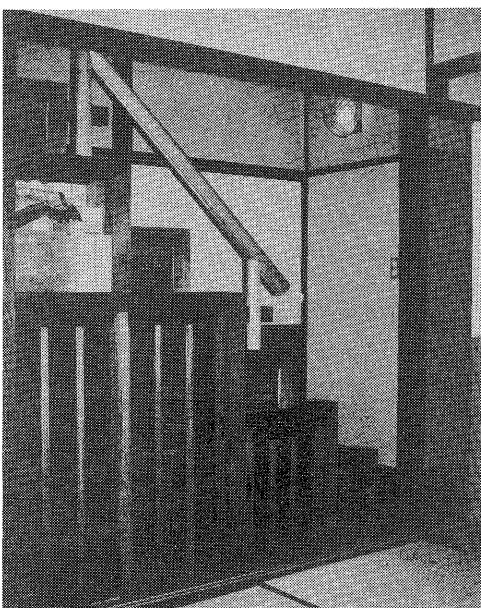
私の妹家族の住む家、猿田邸はこの秋に竣工したばかり。なぜ偶然が重なったのか、或るいは必然なのか、神ならぬ身だから分からぬが、結果として生活文化同人のメンバーが多くかかわった仕事になった。

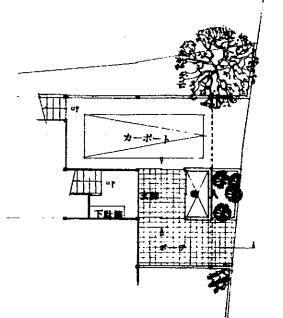
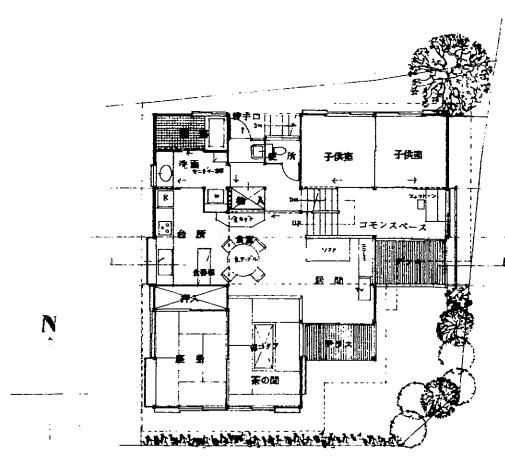
(口絵の写真と紹介参照)

この仕事が飯能の町づくりのキッカケになることができれば、と思っている。

横須賀ではナショナルトラストの米山さんの家がこの秋竣工した。彼の住まいに対する思い入れと、初め

横須賀・  
米山邸

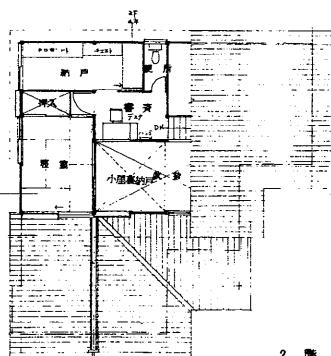




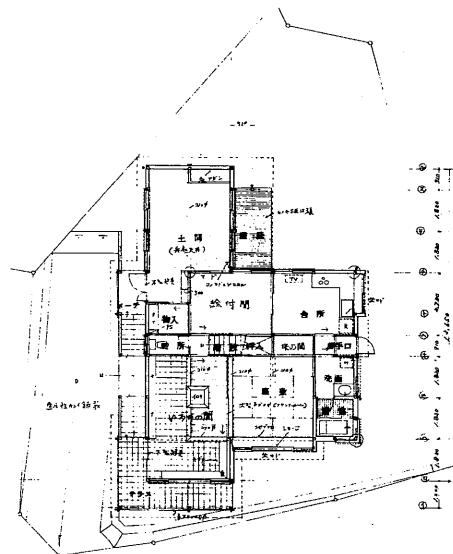
左・平塚・藤井邸

下・飯能・猿田邸

配電図・1階平面図 1/100



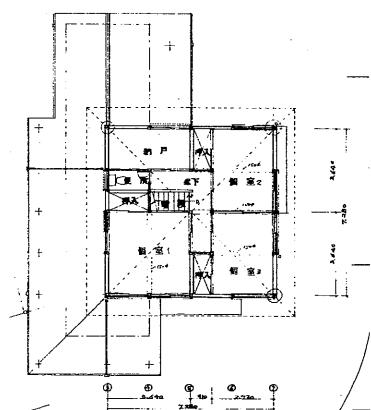
2階平面図



て工事を担当した長谷川さんの力量と熱意で、小さいながら密度の濃い土蔵造り風の家になった。

横浜では河原邸が工事の真っ最中。これはPAC工法で方形の家、連合では佐藤基が担当している。

平塚では藤井さんという若い家族の住む家がこれから着工するところ、吹抜を中心としたスキップフロアの広がり空間がねらいで、これまでと少し違った形をつくってみている。米山さんの家とこの家は、連合での担当は松本昌義。



今年の大平建築宿の分科会でレポートした、東急不動産の新商品、在来構法による新しい規格住宅は、既成の販売態勢との矛盾から、多くのネックに阻まれて苦戦しているが、量的供給を目標として、目下設計作業の渦中にある。

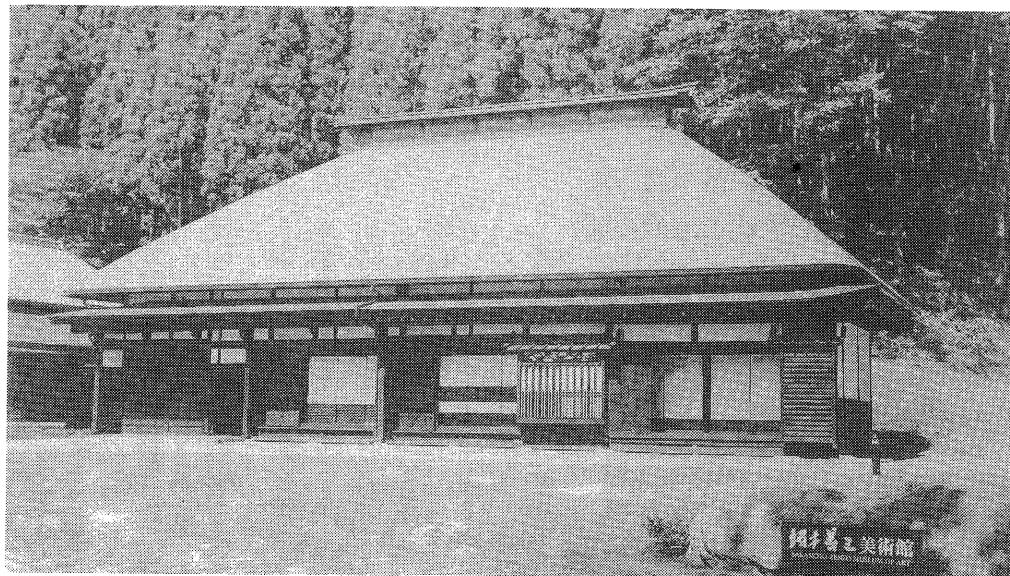
住宅は、他には5つ6つの話が進んでいるが、どれもこれからのことである。

## 地域づくりに関わる仕事のさまざま

このところ、地域づくりとの関わりが急増してきた。町並み保存も地域づくりの一貫として位置付けられるようになってきた。多くの場合、形として関わるものは地域の核としての施設で、これを木造でという例が多く見られる。以下、日本の南から北へ、地域を追って述べてみる。

### ●熊本県小国町・坂本善三美術館

「住宅建築」10月号に、民家再生の事例として発表したので、説明は省略するが、本館はほぼ民家再生、展示棟と収蔵棟はRC造で木造の外壁、置き屋根の構造による。10月14日にオープンしたので一区切りつき、駐車場に公衆トイレがこれからつくられるところ。とはいいうものの、この美術館の運営委員をおおせつかってしまった。将来は西側の公園化した空地に、企画展示棟を建てる計画がある。



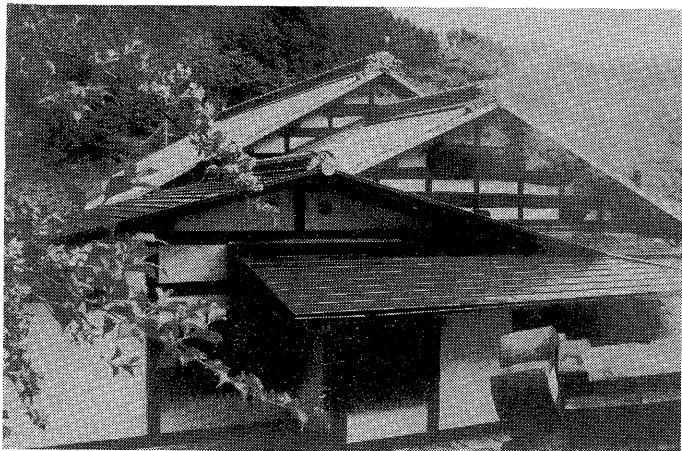
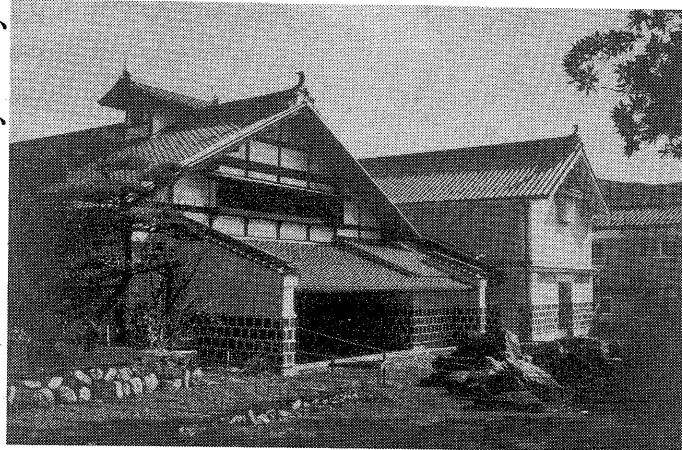
小国・坂本善三美術館

## ●愛媛県内子町・石畳の宿、木蠟館そして今H.O.P.E

内子町には、重要伝統的建造物群保存地区の古い町並みを内包した中心部の外に、山間の農村部が各所に広がっている。石畠はその1ヶ所の地名。「石畠の宿」は、集落内にあった空き家を、以前に保存改修した土蔵を従えた茅葺き民家（住民とビズターとのふれあいの場として）の隣に移築改修し、住民が管理運営する町営旅館に仕立てたものだ。昨年8月に開業、口コミによるPRのみだが、1年余を経過しての利用率は当初の計画をはるかに越えている。

「木蠟館」は重要伝統的建造物群保存地区にある重文民家、上芳我家の屋敷続きの敷地に建てた博物館。展示館は農林水産省の補助金を利用し、内外真壁の純木造、収蔵庫は有形文化財に指定された木蠟の製造用具1400点を納める施設として文化庁の補助金により、RC造ながら木造の外壁、置き屋根だから坂本善三美術館と同類だが、坂本善三美術館の形が小国の大蔵を思わせるのに対して、こちらは内子の蔵の形になっている。「木蠟館」は今年の5月にオープンした。

今かかわっているのはH.O.P.E計画、これは大江健三郎さんの故郷である町内の成留屋地区を対象とするもので、日ごろからH.O.P.Eがコンサル救済事業になり果てているのを苦々しく思っていることから、外人部隊は連合の私と佐藤基のみ、現地パワーを主体としてまとめてみようと思っている。今年度事業なので、3月には報告書として完結させなければならない。ちな



上・内子・木蠟館 下・石畠の宿

みにH O P Eとは、Housing With Proper Environmentの略である。

内子に関わってのこれらは、地域で関わっている人達の成果も含めて、この1月号から発刊される隔月月刊雑誌「造景」に特集される。「造景」は建築知識の編集長を長年担当した、八甫谷さんが独立して新しく始めた雑誌、ご支援あらんことを。

## ●広島県豊町Art &みかんRelation会館の計画

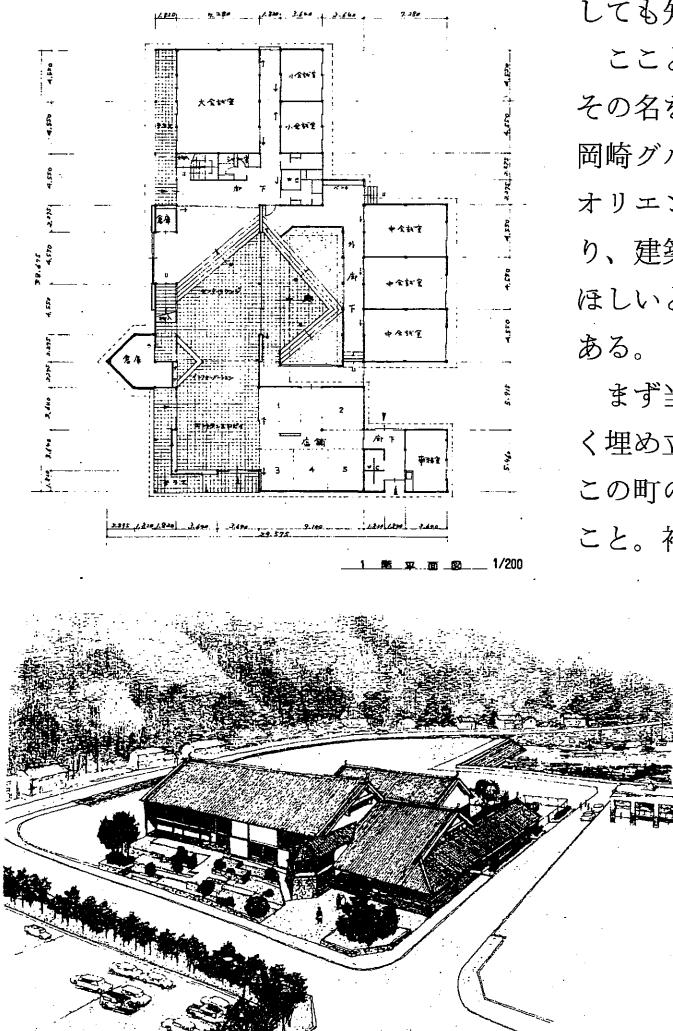
豊町は竹原の沖にある大崎下島に所在する離島の町である。この町には重要伝統的建造物群保存地区の御手洗があり、小粒だが甘味十分のみかんの産地としても知られている。

ここと関わり始めたのは、牛窓でその名を高めたArt運動の仕掛け人、岡崎グループがこの町の町づくりのオリエンテーションをつくりつつあり、建築のプロジェクトを担当してほしいという要請があってのことである。

まず当初は全く急な相談で、新しく埋め立てて出来たフェリーの港に、この町の顔に相当する施設をつくること。補助金がらみなので急いでま

ず1案、つくって提示したのがこの夏のことであった。

まだどうなるか流動的だが、どうやらこの案で進むようだ。この施設の他には待合所を兼ねた乗船所が目下工事中。これがポストモダンで三角のガラス屋根になるのが気になるが無視する他はな



豊町Art &みかんRelation会館

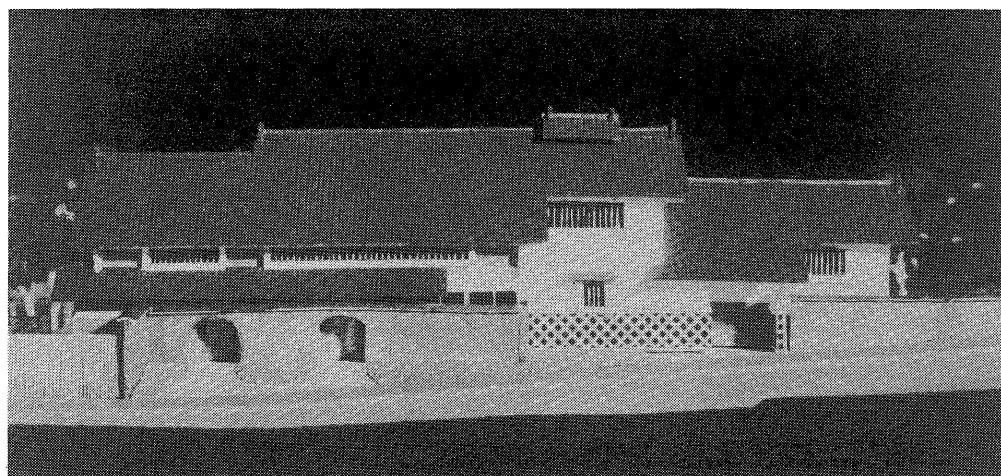
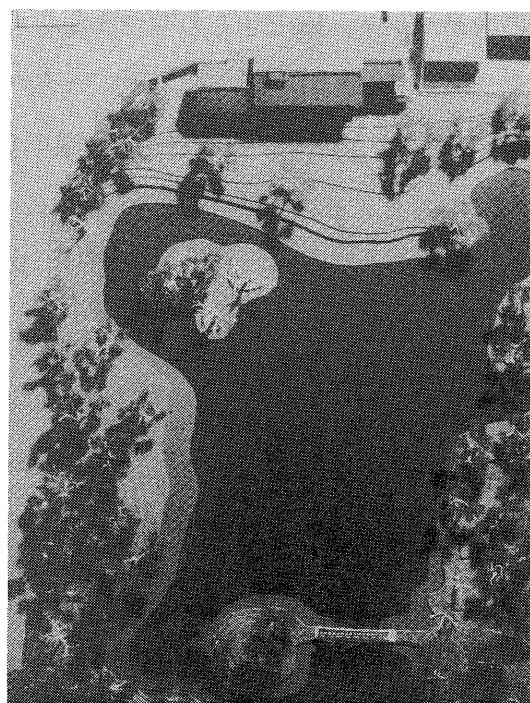
い。むしろ問題なのは、埋め立てた広大な土地を、いかに総合的に計画するかで、長期的なプランが必要だ。

### ●奈良県奈良市・大乗院庭園文化館の工事が進行

奈良市の奈良ホテルの南に、奈良で最古の庭園、平安時代の寝殿造りの庭園だった大乗院庭園が残されていて、ナショナルトラストが管理しているが、公開はされていない。庭園の南隣地が奈良市の所有で、ここに奈良町の町並み館であり、庭園を公開するゲートでもあるトラストのヘリテージセンターが目下工事中。奈良の町屋らしく本瓦葺のムクリ屋根、漆喰塗り廻しの塗屋造りで、3月末に完成を予定している。連合での担当は松本昌義。

### ●奈良県桜井市・奈住協のイベント

奈住協とは、桜井市を中心とした建設業、大工、材木屋、各種職人が集まってつくった地域住宅振興を目指す組織。以前に住宅の設計コンペ



奈良・大乗院庭園文化館

をやり、宮脇檀氏と審査員をし、長谷川君の最優秀案がモデルハウスとしてようやく実現、10月28日と29日にイベントが行われた。私は増田一真氏とトークショーというのを長々とやったが、何といってもイベントの華は耐震実験用に建てた家を百人で引いて倒そうという試み。この実験棟の設計を担当し、筋違なしの通し貫で固めた構造が大丈夫かどうか、増田さんに相談しながらやったのだから倒れないはず、と思いながらも内心はビクついていた。結果は4.3tの力がかかり、増田さんの言では震度7、僅か6ミリ動いたのみだった。奈住協との付き合いは大阪市大の田中康夫氏が仕掛け人で始まったものだ。

### ●奈良県大字陀町・H O P E 計画の実施を提案

奈住協の人とのつながりから、桜井からほど近い大字陀町へ田中康夫氏と同行して、非公式ながら懇談会を持ち、町づくりのオリエンテーションを定めるため、H O P E 計画を実施したらどうか、という提案をした。このところ2度ほど訪れているが、ここも見事な歴史的町並みを残していて、ずっと以前にも何度か来ている。ここでの保存も位置付けたH O P E をやってみたい。住民の反応はすこぶる積極的で、この12月末にも行くべく考えている。

### ●福井県上中町・熊川宿が重要伝統的建造物群保存地区に、そして整備を

若狭の小浜から京都へ、かつて鰐を担いで走ったという鰐街道の近江に越えるどんづまりに、熊川宿と呼ぶ歴史的町並みを整然と残した街道町がある。この調査はナショナルトラストが以前に実施し、当時は明大助手、現在は東大



大字陀の町並み

助教授の西村幸夫氏と、ご存命だった西山先生を看板にして一緒にやった。飛驒古川と一緒に調査した縁からであった。

一時期盛り上がった町並み保存の運動の火の消えかかっていたのが再燃して、昨年はこの町づくり委員長をおおせつかっていたが、ようやく町の意思統一が出

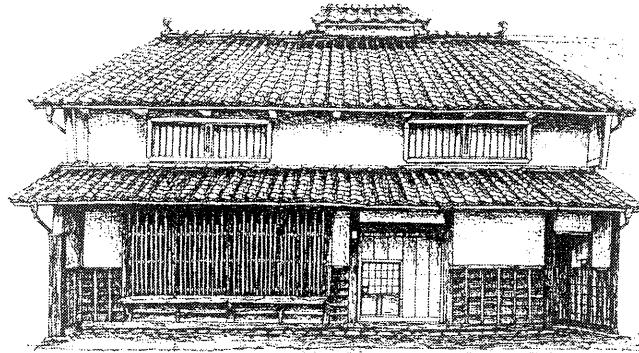
来、今年の9月町議会で法案を可決、目下は文化庁との間で手続きが進行中、遠からず福井県で初めての重要伝統的建造物群保存地区が誕生する。11月末には私も加わって第1回の審議委員会が開かれる。

熊川でまず始まるのは、昨年実測調査し、今年保存改修の設計をした旧逸見家の工事、この家は街道中心部にあって、町並み景観の上でも重要、入念につくられた質のよい町屋だ。この保存改修は、民家は住み良く直せて素晴らしい生活空間がつくれるのだ、ということのサンプルにするよう意図されている。

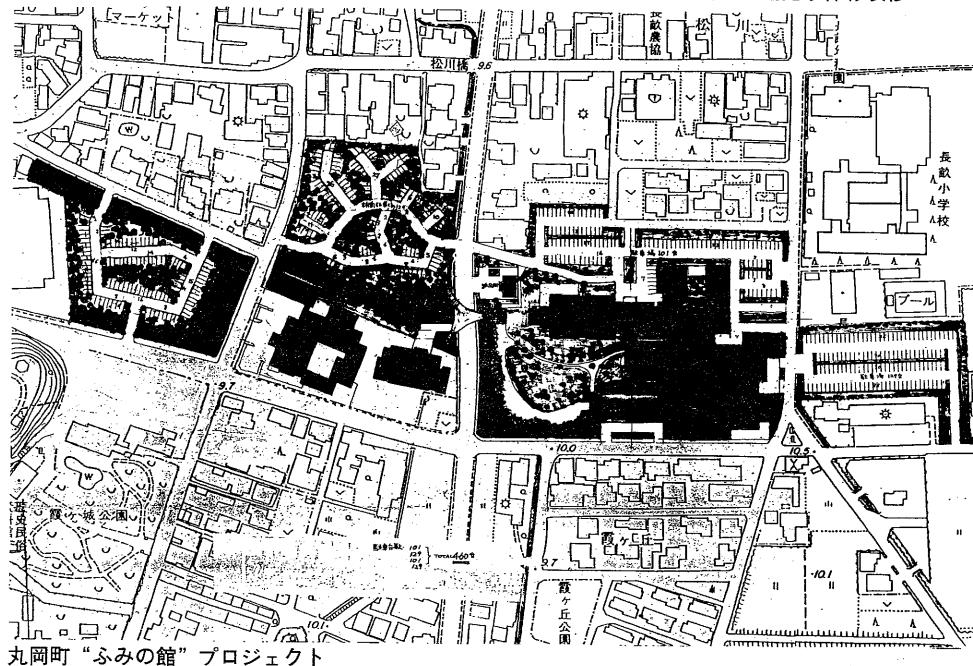
熊川ではさまざまな公共事業が計画されているので、これらを矛盾なく実施できるよう、調整が緊急事となっている。そうした中には「道の駅」事業や、旧役場で農協が使っていた西洋館を「鯖街道資料館」として再生させる計画もある。

### ●福井県丸岡町・ふみの館

この町では以前、「中野重治記念・町民図書館」を



熊川宿・旧逸見家保存改修



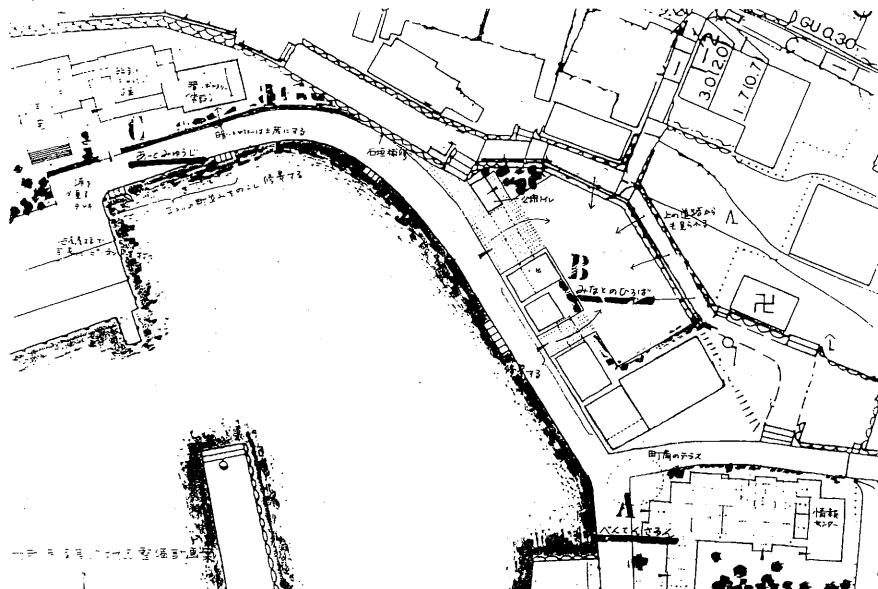
設計しているが、その頃から少しづつ検討を重ねてきた、お城を取り巻くエリアである町中心部の核づくり計画が、「日本一短い手紙」運動の成功でようやく実施に向けて具体化し始めた。「丸岡城復元模型」をつくったのも町づくり運動の一つ。内容はまだ流動的だが、「手紙博物館」とか「芝居小屋」などを含んだ総合文化施設で、96年度には設計に入る予定として目下は基本設計の検討段階にある。

### ●愛知県一色町・佐久島西町港湾周辺地区整備計画

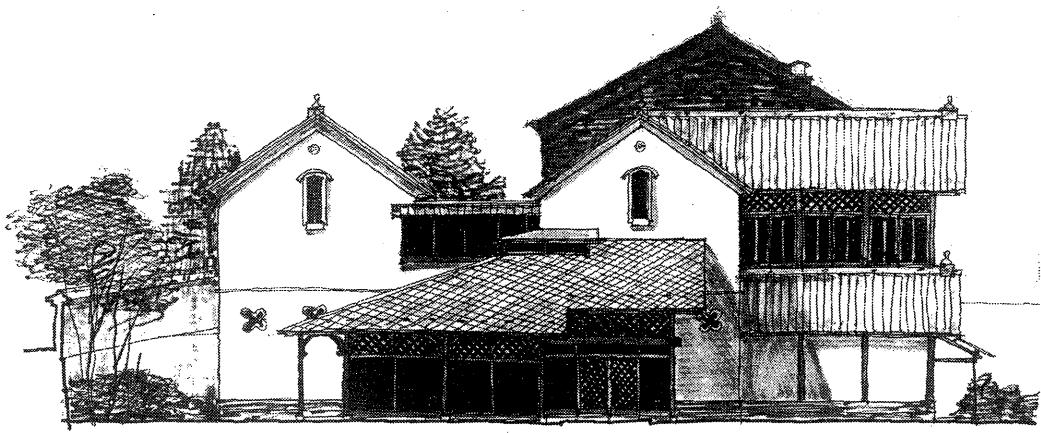
一色町は知多半島と渥美半島に抱かれた三河湾の奥に所在し、佐久島は町の飛び地として湾内の離島になっている。豊町で始まった離島センターとのコンタクトで、この島の島おこしをお手伝いすることになった。一色町の港から30分ほどで着き、東海道の大都市圏から遠くもなく、釣り人や海水浴客が大勢くるというのに、大資本の開発からまぬがれてきた島の風景はのどかだし、人情もこまやかだ。まだ1案を提示した段階だが、この島の西町港湾周辺地区整備計画というのをタタキ台としてつくった。民家再生利用の「べんてんさろん」と名付けたコミュニティセンター兼ビジターセンターを具体案で示している。

### ●茨城県古河市・永井路子文学館の計画

十数年も前から関わり続けてきた古河市での町づくりの仕事は、市長交代で



一色町佐久島・西町港湾周辺地区整備計画



古河・永井路子文学館

頓挫していたが、今年の三月の市長選で小倉さんが返り咲き、今、歴博の隣地にこの町の出身で、市長の友人でもある歴史小説家の名を冠した「永井路子文学館」を建てる計画を進めている。永井さんの蔵書を収容し、お住まいの一部を再現させ、多目的に使う文学ホールが中心となるだろう。設計は96年度から。

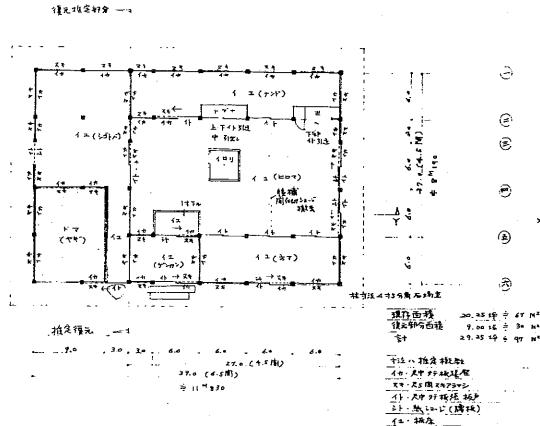
#### ●開田村の民家をパリに移築する計画

これはまだ実現するかどうかさだかでないが、フランスの国立文化研究所のプロフェッサーで民俗学者のジャーヌ・コビィ女史とパリで知り合い、彼女が貰った木曽開田村の民家を、パリの民俗学博物館に移築復元する話が少し以前から進んでいる。幾らかかるかが問題なので、

かかるかが問題なので、

今月の5月、彼女の案内で益子さんと一緒に見に行った。規模はさしたることはないが、古形をよく残した板葺きの家だった。現在は益子さんの見積りで正規の書類をパリに提出しているところ。

開田村・旧畠中家復元図



## 講演・国産材開発・受賞・学校など

### ●講演

省エネルギー住宅のシステムの一つである「パッシブエアサイクル」略してPACの参加工務店が、多くは地方新聞の主催で、家を建てたいと思っている人を集めて開く「健康な住まいづくり」ゼミナールという催しが、年間を通して各地で開かれている。

PACとは十年以上の付き合いがあって、今では顧問ということになっているが、この間に生活文化同人のメンバーでもある小林・松本・長谷川の3人を講師として送り込んだので、PACの設計講座は今では彼等が担当、私は非常勤のような立場にある。けれども参加工務店のゼミともなれば、やはり出馬はまぬがれぬ。しかしどんどん引き受けていると土日が全部潰されてゆく。土日は年間で百日しかないのだから、全部潰されてしまうと他から入ってくる講演を一つも引き受けられなくなる。これでは困るので、PACのゼミは年間で20回までにした。後は3人がフォローしてくれている。このゼミでの講演内容の中心テーマは常に間取りである。

もう一つ年間を通じてあるのは、品川の教育委員会の開いた住まいの勉強会が契機となってつくられた「土曜の会」の会合、これは気楽な会だが、年度ごとに研究テーマを定め、秋にはその発表、公開講座というのもある。品川区の公務員であり、生活文化同人のメンバーである伊藤秀夫さんはこの会の出自だ。



PACゼミナール 上平村・菅沼



今年やった講演を順次述べると、3月25日に小林さんの要請で開いた寄居商工会の「町づくりへのコンセプト」と題した小規模講演。5月27日に一関で岩手県建築士会が開いたのは数百人規模で演題は「家づくりと町づくりを結ぶ」。10月8日は五箇山で北日本新聞が主催しての、ここがこの年末にユネスコの世界文化遺産に指定されるにあたってのイベントで、これも大規模講演だったが演題は「歴史的遺産保存の意義」とした、10月16日には逗子での市民大学講座として80人ほどを対象に「民家の見方、楽しみ方」。11月7日は銀座のヤマハホールでインテリア協会が主催してインテリアコーディネーターを大量に集めての講座で、「日本人の住まいの形」というのを演題した。

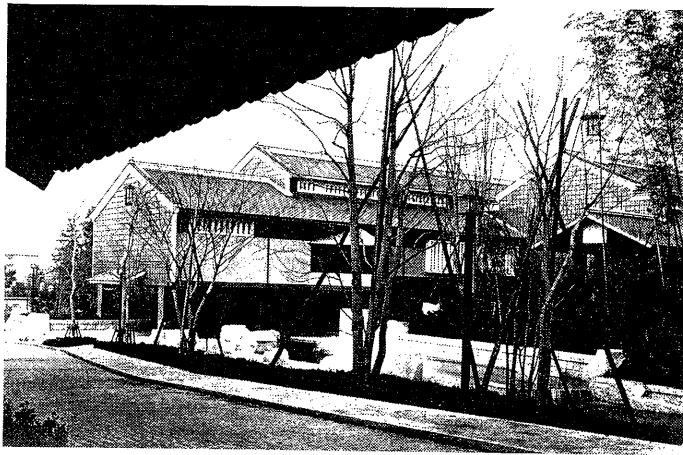
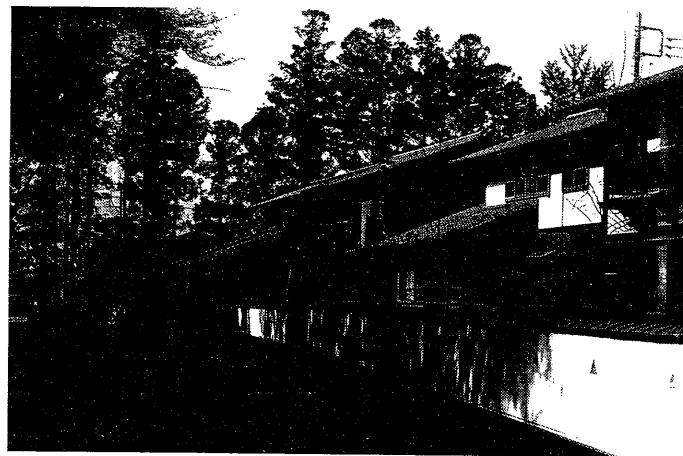
### ●国産材開発

これはまだ何が製品化できるか分らない。新潟県工業研究所の事業で国産の杉材の強度を上げて、建具なり家具なりをつくろうという試みだ。加茂建具との付き合いで委員を引き受けたものの、肝心の加茂建具があまり乗り気でないのは困ったことだ。

### ●受賞

今年は二つの受賞があった。その一つは5月30日に受賞式が水戸であった、茨城県ゆとりのある生活推進協議会が主催する「ふるさとの住まい振興賞」で、受賞の対象は古河市の「まくらがの郷」。この賞は建主・設計者・工事担当者の3者に贈られる。

もう一つは「公共建築賞優秀賞」で、これはこの11月に内定。受賞した対象は「古河歴史博物館」。時期が遅いようだが、これに



上、まくらがの郷 下、古河歴史博物館

は訳があった。建ててから運用の仕方、利用度の高さも審査の対象とするからだ。したがってこの賞も、建主・設計者・工事担当者の3者に揃って贈られる。

### ●学校

去年から母校である東京芸術大学の客員教授を引き受けている。時たま設計課題を出して、その時は毎週行くが、後はご隠居のような気楽な立場だから、何の気苦労もないし、責任もない。

もう一つは月に一度のNHK文化センターでの絵画教室。0.05ミリのサインペンで町並みや民家を描くのが授業の内容だ。去年から始めて2年目だから、教室には1年生と2年生が同居している。なにせウィークディの昼間だから、リタイアした爺さんと、暇と金に困らないおばさんばかりなのが残念といえば残念だ。

もう一つの学校は「女性建築技術者の会」の有志を対象にした「木造架構の勉強会」。ふた月に一度だから年6回でカリキュラムが組んである。彼女らの木造住宅の設計技術を向上させるのが目的で、ことのはずみで「やってやろうか」と言ってしまったのが運の尽き、この教室はボランティア活動だ。もっとも授業をした後の飲み会は只にしてもらっている。毎回の授業はカリキュラムに従って高度化してゆく宿題の添削を、OHPを使ってまずやり、新しい内容



女技会・木造架構の勉強会 教室風景

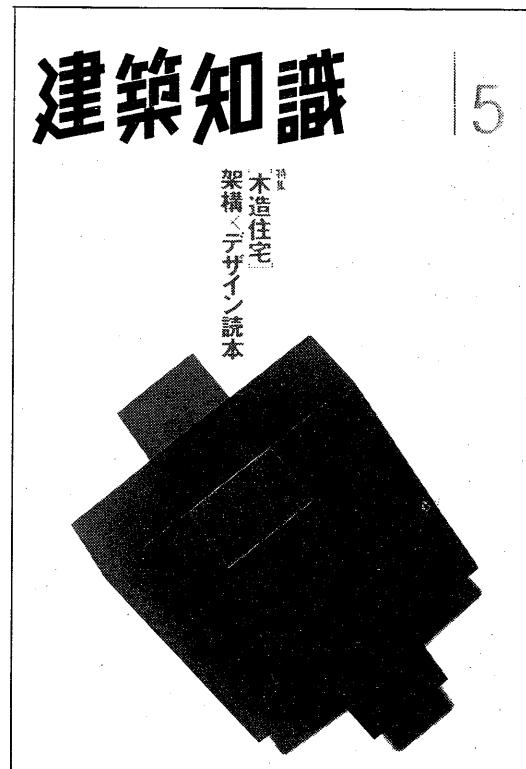
の解説をし、それに適当と思われる実例（もちろん私の設計）をOHPとスライドで説明、最後に次の宿題を出題している。欠席したら次からは受講停止、宿題不提出も次から受講停止、途中からの受講は禁止、というかなりキツイ条件でやっている。したがって講座終了時の受講者は、全出席・宿題全提出者ということになる。4月に60数人いたのが12月にはほぼ半減した。徐々に精鋭化していっている。

## ●著作

5枚から20枚程度の、月間雑誌やムックなどの単発原稿を年間でどれほど書いているかは数えてみたこともない。そんなのは別にして、今年著作といってもよい仕事は3つだった。

一つは「建築知識」5月号の「木造住宅、架構×デザイン読本」の一部で、これは雑誌原稿ではあるけれども、相当長文でもあり、架構グリッドプランニングの手法について、より体系的に整理してみたので、これまでに書いたこの種の内容の単行本よりも、よくまとまったと思っている。女技会の「木造架構の勉強会」はこの著作の副産物といってよいのかもしれない。

もう一つの著作は「彰国社」の「快適間取りのつくり方」。これは、もはや15年も前に書いた「主婦と生活社」の「住みよい間取り」がまだ売れていて、百数十版にもなっているが、内容が今では気に入らぬところが多くあって、絶版にしてほしいと言っても売れている本を出版社が絶版にするはずがない。ならば改訂版を書けという。そうなると全く新しい本になってしまいそうなので、もう結構という気分にもなる。そんなこんなで出版社は変わったが「快適間取りのつくり方」は「住みよい間取り」の後継本なのである。今度は共著にして、同人で連合出身または在連合の小林・松本・長谷川を加



えた4人の著書になった。

もう一冊は「東京堂出版」の「歴史の町並み事典」。これは「東京堂出版」からこれまでに出している“絵のある本”、「町並み・家並み事典」「民家ウォッチング事典」「中山道民家の旅」に続く本で、現在までの重要伝統的建造物群保存地区、40ヶ所のすべてを網羅した民家・町並みの絵本兼ガイドブックになっている。

著作には次なる企画もある。「快適間取りのつくり方」の姉妹本、“絵のある本”の次なる本、こんなのを96年には出したいと思っている。

## ●個展

今年は個展を二つにした。

一つは恒例の年末個展、神楽坂の“歩”ギャラリーで11月10日から22日まで。展示した絵は「歴史の町並み事典」の原画48点で、軸装ものと額装ものにした水墨画。新聞の新刊紹介や催し物案内で報道されたので、これまでやってきた11回の個展とは比較にならないほど入場者があった。ここで改めて感謝いたします。来年の恒例個展は既に日が決まっていて、11月15日から27日。



歴史の町並み事典

暮らししから描く  
快適間取りのつくり方  
おすすめプラン120

あなたの理想の間取り

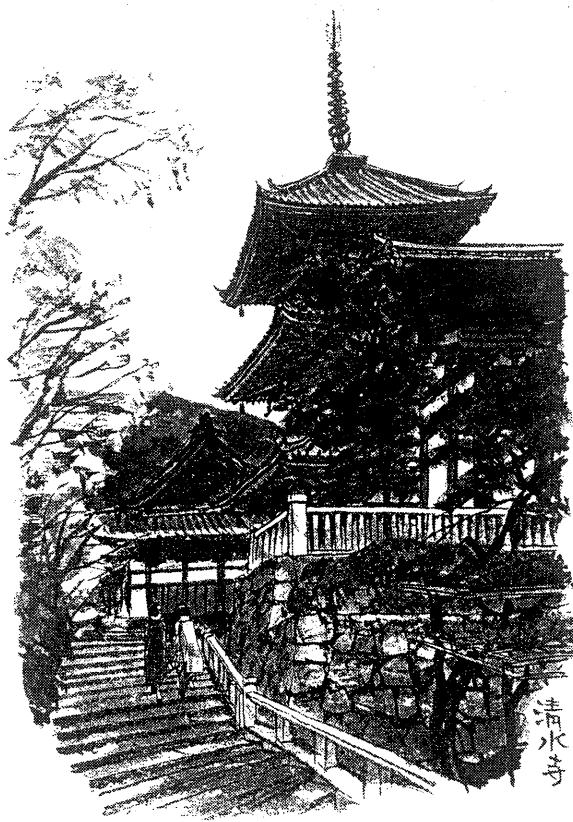
吉田桂二編

あなたはどんなライフ・スタイルをお持ちですか。  
それをしっかりと見つめなおして下さい。そして、  
この本をマスターすれば、住みよい間取りが出来  
ること受けあいで下さい。

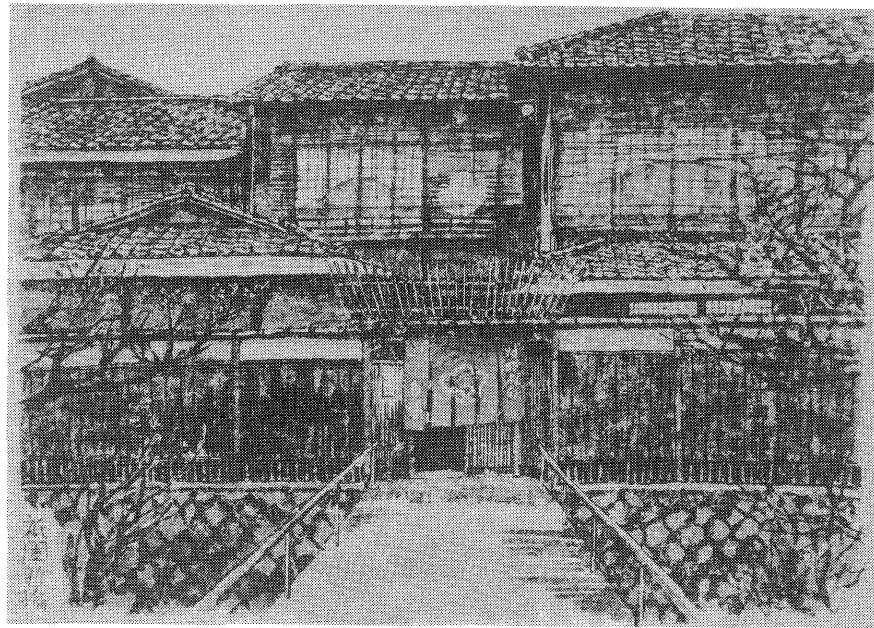
快適間取りのつくり方

もう一つの個展は、郡山の福島エアサイクル住宅のモデルハウスで、11月3日から7日まで開いた小個展。このモデルハウスは小林君の設計になるもの。

この展覧会は福島で青磁や白磁の焼き物をつくっている作家の作品も展示された複合展で、住宅空間に飾られ、来た人はモデルハウスの空間も同時に見るという効果もねらいだった。オープニングの夜には、フルートとピアノとヴィオラの室内楽の演奏もあった。この個展の絵は1996年カレンダーの中の8点になっている。



清水寺



祇園新橋

## 第2回『大平建築宿』 増田 一眞 基調講演

### 「伝統構法のこれからの方針性」

#### 「伝統構法」と「在来軸組構法」

与えられたテーマが「伝統構法のこれからの方針性」ということだが、現在は「伝統構法」より、「在来軸組構法」の方が一般的である。

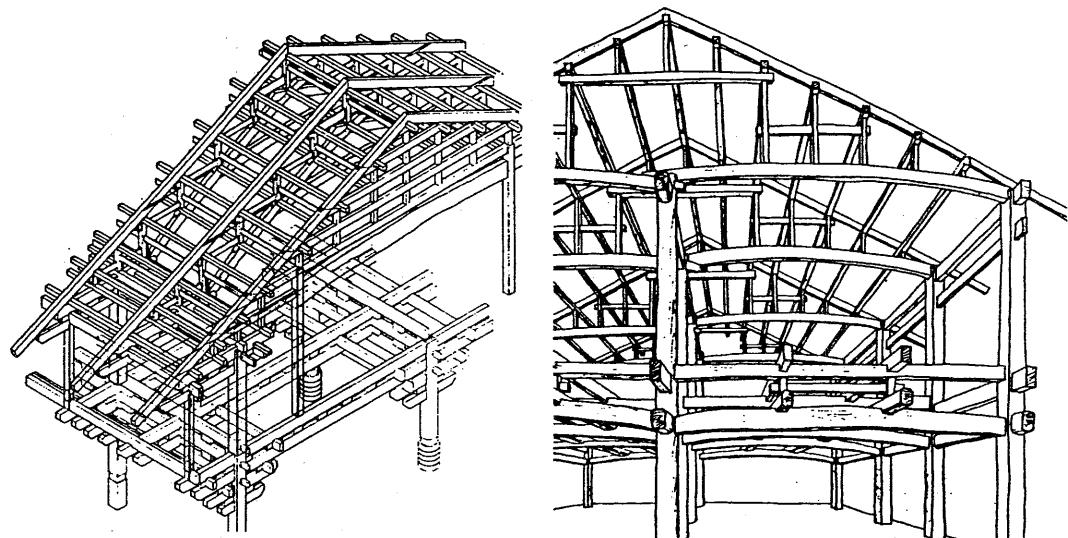
では、「在来軸組構法」と「伝統構法」とはどう違うのか。

在来という言い方は紛らわしい言葉で、「伝統構法」と混同される方もおられるが、「在来軸組構法」とは、おもに戦後、住宅金融公庫の融資制度ができてからの俗に「公庫仕様」と呼ばれているものを指す。

この大平宿の民家は、1尺角の大黒柱と差鴨居が組合わさり、接合部をシャチ栓で引張る、いわゆる剛接構造と呼ばれる架構をなしている。それに貫と板を組合わせて耐力壁を構成している。わたしが言うところの「伝統構法（伝統的木構法）」とは、このような昔からの民家の木構法を指す。勿論、「伝統構法」には、社寺建築、城郭、蔵などがすべて含まれるが、社寺建築は特別なので、わたしたちが住宅などを設計するときにその言葉を使う場合は一般に民家のようなものを指す。それは、長い歴史の中で、大工・棟梁たちが築き上げてきた構法で、日本人の美意識を大変よく表現した、世界で類を見ない、美しい建築である。

米国から来日したライトでさえ日本の大工の技術に舌を巻き、「世界で木のことを一番理解しているのは日本人ではないか」と残しているほどである。

昨今、「パネル構法」というのがはびこっていて、特に阪神・淡路大震災以後は、軸組というものは定規の役割という意味あいだけで、パネルで持たせようというのが主流になって



『ディテールNo.101～112』 イラスト協力：竹村祐子

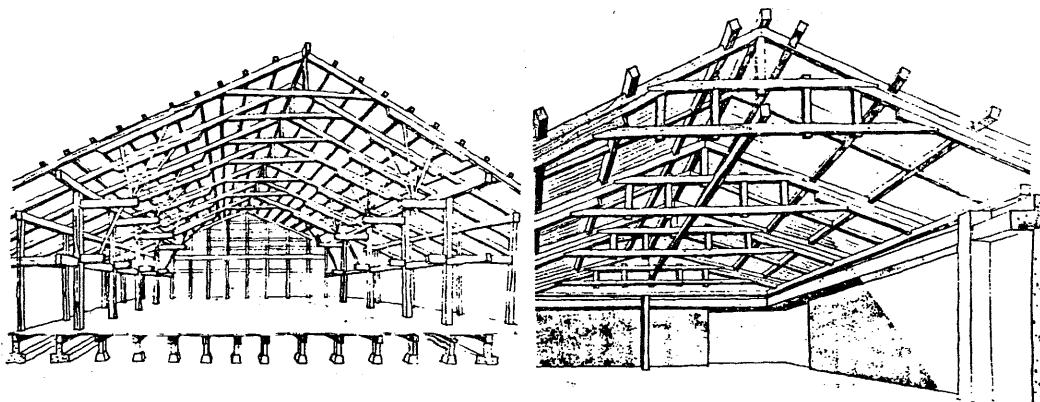
きている。いくつか見学したが、それらは戦後に急造された「ブラック造り」より、もっとひどいという印象を受けた。「ブラック造り」とはベニヤを釘止めし、面剛性を持たせているので、ガイドにした軸組がたとえひ弱でも、建てた当時は持っている。何年持つかということになる疑問ではある。結論としては、日本においては軸組さえしっかり組んでおけば、その間に組み込むのは、たとえばベニヤパネルでもよいし、板倉方式でも、貫でもよい。つまり、貫だけの軸組みでも十分に成立しているわけである。

現在連載している『住宅建築』でも書いたように、「曲げ系架構の成立」ということで、壁が一切ない架構もありうることを、今の時点で強調しておかないと、通し貫による軸組み架構が消滅し、全部パネル化してしまうのではないかと危惧している。

やはり、基本骨格をしっかりとつくるにおいて、その柱間装置を取り替えられるという、改造の自由度が日本の風土に一番合っていると思う。

現在に至るまで、「伝統構法」が「在来軸組構法」に取って代わった経緯が建築の発展であるかのように言われてきた。日本建築学会から出されている『近代建築発達史』の中の木造についての記述で、明治以前のものは大変脆弱であり、西洋の建築家が筋違をいれるよう指導した結果、丈夫になったと示し、それを建築的に発達とみなしているが、わたしに言わせれば、「木構造衰退史」に外ならない。

明治になって洋風建築、つまり、鉄骨造やRC造が入ってきて、新しい構法が増えたのはよいことだが、一方、佐野利器らの学者によって、日本の伝統がすべて否定された。それに対して、当時の大工・棟梁は日本の伝統構法が十分耐震的であると反論した。しかし、柔硬論争が盛んに行われている中、関東大震災や豆相地震が起きる毎に地震についての分析が行われ、伝統構法が耐震的であるという議論もあったが、結局、筋違で固めるという、佐野利器が主張する「日本家屋耐震論」が主流をなすようになってしまった。過去の経験の積み重ねによって築きあげられた構法が全面否定されることとなった。



## 伝統木構造の耐震性

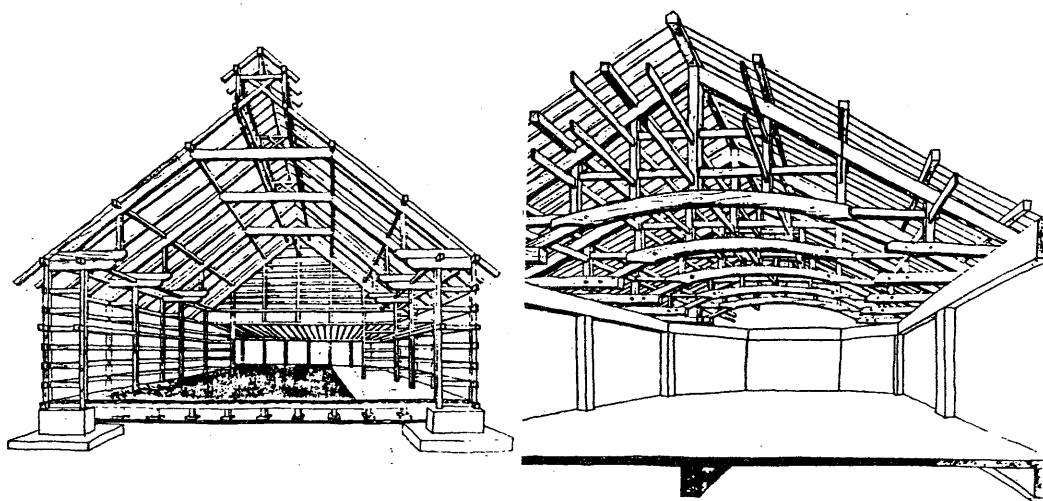
このように過去の経験から生まれたものが全く無力であったこと自体が問題であるが、現在でも、東大の坂本教授は「昔の日本人には地震によって建物が倒れるのは当たり前だという認識があった」と考えておられるようだが、議論の余地が残るところである。

伝統構法が外国人建築家や西洋の教育を受けた学者らによって否定されて以来、現在も続いているが、少なくとも次の点は検証されていない。①世界の中でも技術水準が高いかつての大工・棟梁が、地震や台風のたびに壊れるような建築を造り続けてきたのか、②その歴代の大工・棟梁たちはそれほど無思慮であったのか、③木造において柔構造が成り立たないことが科学的に実証されたのか、④かつての大工・棟梁は筋違を知らなかったのか、⑤当時の施主たちは建築の丈夫さについて無関心でありえたか。

わたしは決して昔の大工・棟梁が無思慮に建てていたとは思えず、かれらが地震があっても壊れないという確信があったと思う。

ちなみに、貫構造の始まりと見られる重源による「大仏様」という構造表現主義的な手法は流行しなくなるが、民家のなかに生き続けている。民家は貫や差鴨居と柱による直交性が基調になっているが、もともと日本に筋違がまったく存在していなかったのではない。鈴木嘉吉さんによると「平安時代に筋違を入れた建物が存在していたが、その後なぜか鎌倉時代初期に筋違は消えていった」ということであるが、それは、筋違を入れた壁はひび割れを起こすために、採用されなくなったのではないかと想像する。日本の家屋は貫を通して土壁で固めることで部分的には剛性が高く、全体の架構としては柔構造になっており、十分耐震的である。

伝統木構法の周辺について言及すると、日本人のつくってきたものは、建築だけでなく、他の構造物であっても、西洋の発想とは違うことに気がつく。その根本的な相違点は、西



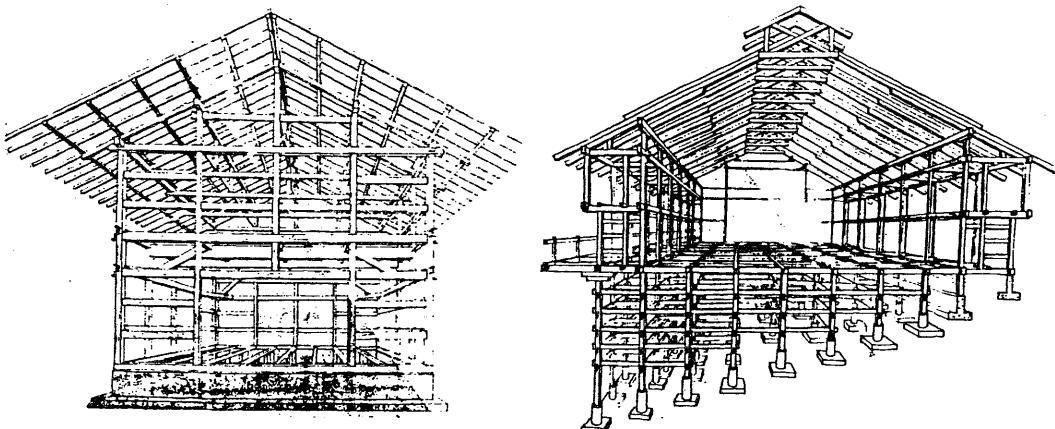
洋では自然に対抗するかたちでものをつくるが、日本では自然に従つてものをつくる思想がある。

たとえば、雨仕舞いの場合は、萱葺屋根でみられるように表面で直ぐにはじかないで、一旦、雨を引き入れてから外に逃がす工夫をしている。治山治水の場合は、現代の西洋の技術を身につけた工学者は土手を高く築くことだけを考えるが、江戸時代では遊水池を設けることで対応していた。その辺の詳しいことは富山和子さんの著作を参照してほしい。

つまり、歴史的にみると日本人の知恵というのは、西洋人が考えるほど浅薄ではなく、大変深い思慮があってのもので、あらゆるものに共通して言及できる。

来日したコンドルなどの西洋の建築家は「日本の建築は弱い。その理由は、①基礎は礎石のみで、その上に柱を立て、足固めで固定しているだけで、基礎が不完全である、②壁や小屋組に斜材がない、③柱の貫穴による断面欠損が大きい、④独立柱が多く、孤立している、⑤屋根が重い、などが挙げられる」と日本の家屋に対して批判的であった。しかし、これらをよく検討すれば、①地山がよい場所に建てるので、礎石のみで十分である、②土壁が耐力壁になる、③接点数を多くすることで応力を分散している、④通し貫が柱を結んで、立体構造をなしている、⑤台風の多い日本では、屋根が重い方がよい、などの理由がある。今日の「在来軸組構法」は、部分を固めるだけで、全体を立体構造として固めない、応力集中型の構法で「伝統構法」とは対称的である。総じて言えば、日本の伝統構法は永い経験によって築き上げられた、日本の風土に適合し、自然に逆らわない構法である。

架構のつくりかたには曲げ系、軸力系、剪定系の3つの抵抗要素があり、それぞれ単独で、あるいはいくつかの組合せで架構を構成することができる。現在の「在来軸組構法」も問題点は、3つの抵抗要素のうち、筋違による軸力系抵抗しか認めていないことである。もう1つは、架構を全体として一体化させる、総持的な発想がなく、部分的な抵抗のみに矮小化していることである。わたしの考える伝統構法の基本とは立体架構を組むである。

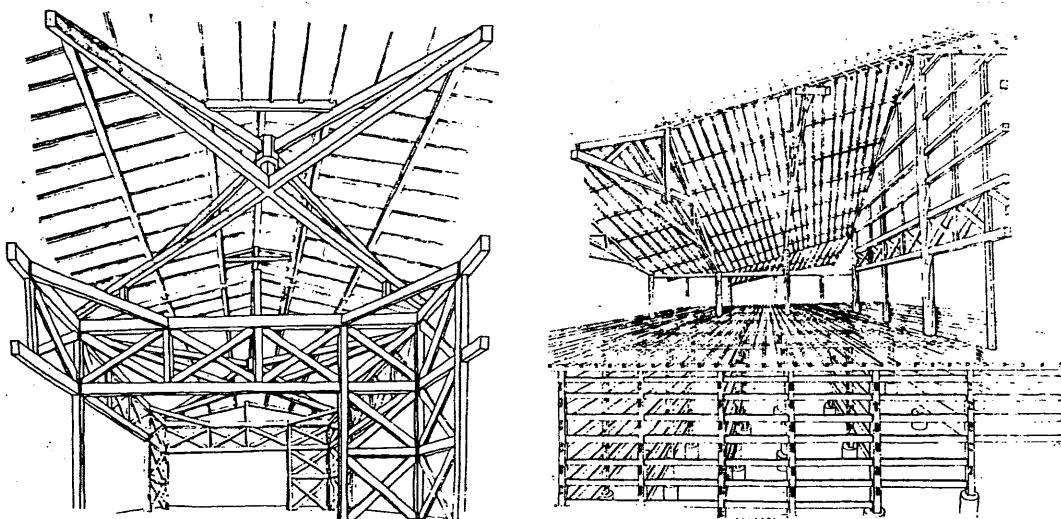


## 「職人文化」と「学者文化」

西洋の民家が筋違で固める構造になったのは、19世紀の鉄道の発達に伴うトラス理論の隆盛が背景にあると思われる。当時はまだラーメン構造の理論が知られていないく、トラス理論が絶対視されていた。そのトラス理論しか持ち合わせていない外国人建築家によって教育を受けた日本人建築家は、明治以降、伝統構法の合理性を研究することなく来てしまった。わたしはそれを「100年の空白」と呼んでいる。

理論はなくても経験を頼りにつくったものが、現実にりっぱに存在している例はたくさんある。例えば、アーチ構造などは後から理論ができたのであり、せり持ちが有効であるというのは経験によって発明されたのである。重源が最初に実現したと思われる東大寺南大門の貫構造はラーメン構造が成立しており、これも理論ができるはるか以前に存在した実例である。

わたしは「職人文化」と「学者文化」と対比させて考えているが、職人が自分の身体、感覚で千数百年かかって築き上げられてきた日本の文化を、外来文化に一蹴されることに強い憤りを感じる。昔の民家をみると、意匠においても、構造においても、その当時の大工・棟梁のそのデザイン力に感動すら覚える。



## 建築構法の7条件

### ①耐力性

地震や台風などに耐えうる建築の構造形態は、柔構造・剛構造ともに成り立つ。伝統構法においては、土蔵や城郭は剪断系の剛構造であり、書院造りは曲げ系の柔構造、民家は剪断系と曲げ系が混在した柔構造である。

### ②耐久性

日本の気候・風土に適した構法が安全性と耐久性を保証する。伝統構法には、地業の造り方、適材適所の樹種の選択、木材の乾燥・仕口・継手の工夫、雨から建物を保護する深い軒の出、通風の確保、手入れや修理方法の確率、などの耐久性を保証する要素が備わっている。

### ③美観性

構造的合理性をふまえた、日本人の美意識にかなうデザイン。真壁による意匠性、柱・梁が織り成す簡素な美しさ、羽目板や格子のリズムなどに見られる美観性の優位。

### ④経済性

構造即意匠の最小限のデザインが成立し、耐久性・耐力性を合わせもつ、つまり丈夫で長持ちする経済性の表現

### ⑤環境性

日本の気候・風土に調和した意匠、自然のエネルギーをうまく取り入れたデザイン、再生などによる資源の有効利用

### ⑥移築性

解体、再生が容易な構法。

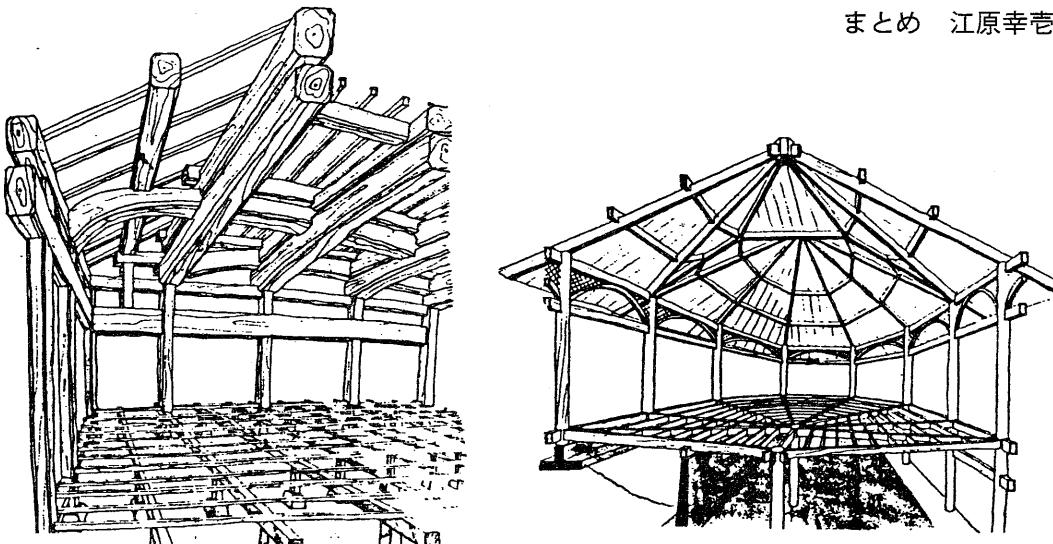
### ⑦混用性

木と土、石などの自然の素材の組み合わせで構成する。

建築構法が充たすべき条件とは以上の7項目であり、伝統構法はこれらの条件をすべて満たしている。

(敬称略)

まとめ 江原幸壱



# 在来型の木造で可能な 自由な空間構成の手法

増田一眞

(増田建築構造事務所代表)

## ●はじめに

住宅規模だと梁間2間（1間は1.82m）からせいぜい3間どまりだが、園舎や校舎では間口は4間から6間必要となる。さらにプレイルームや体育館兼講堂では8間から12間くらい、あるいはそれ以上の大空間が要求される。規模に応じた適切な木造架構手法は、基本形態だけでもすでに数多く発見されており、ヴァリエーションも含めると無数にあるといってよいくらいである。鉄骨や集成材に頼らなくても、普通の木材で伝統的な継手と仕口を用いて木造大空間を造ることは、充分に可能なのである。

架構手法は、建てる順序から考えると

- I 軸組：壁面の構成法とその表現。
- II 床組：床面の構成法とその表現。
- III 小屋組：屋根の構成法とその表現。

の3つの部位に分類される。

各部材に発生する主応力で分類すれば

- I 軸力系：部材の圧縮・引張で耐える。
- II 曲げ系：部材の曲げ抵抗で耐える。
- III 剪断系：部材の剪断抵抗で耐える。

およびこれらの混用系の4タイプからなる。

例えばトラスや筋違は軸力抵抗に頼っている軸力系構造で、書院造りのように柱ただけ

あって壁のない架構や単一梁は主として曲げ抵抗に期待しているから曲げ系構造と呼ばれる。剪断系というのはツーバイフォーのようにベニア板の面内剪断抵抗を利用したものがそうであり、わが国の伝統的木構法に用いられた土壁や板壁、さらには組積造やログハウスなども剪断系の部類に入るのである。図-1

それぞれの構造系は固有の特徴をもっているが、系の間に価値の上下があるわけではない。曲げ系より軸力系の方がすぐれた系であるなどとはいえないし、剪断系が最も良いなどともいえない。材料の利用効率からいえば、曲げ系より軸力系の方が力学効率は良いが空間効率は逆に悪い。

世界中の民家の構法を眺めていると、実にさまざまな架構手法の工夫がなされていて興味はつきない。風土、材料、機能に良く適応していて、それぞれの構造系を巧みに組み合わせている。わが国でも奈良の慈光院のように、奈良三山を望む広大な借景をとり入れるに不可欠な柱だけの架構もあれば、土蔵や城郭のような壁っぽい構造もある。

橋をとってみても猿橋のように持送り手法のものもあるし、眼鏡橋のような石造アーチ、更には錦帯橋のように木造の見事なアーチも見うけられる。

それぞれの建築計画に最も適合するように架構系の組み合わせを考えるべきで、架構系が建築計画を不自由なものにするようでは、話の筋道が逆である。木造で開放的な空間にしたいときは柱だけの曲げ系を採用すべきだし、大空間にしたいときは例えはアーチを採用すればよ

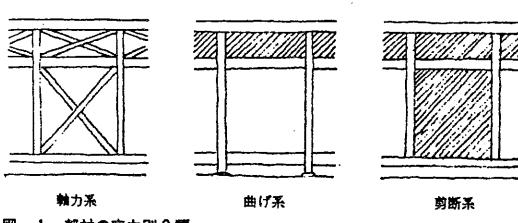


図-1 部材の応力別分類

い。コンクリートでつくるときと木造の場合とでは、アーチのつくり方が若干異なって少し工夫を要するというだけの話である。

丸鋼は強い張力材だから有効に用いるならば、伝統木構法にもう一つの自由度を加えるものとなる。

架構手法の基本系を列記すると次のようになる。すなわち

- ① アーチとケーブル (軸力系)
- ② トラスとボウビーム (" )
- ③ 斜柱・斜交格子 (" )
- ④ 張索系システム (" )
- ⑤ 単純梁と片持梁 (曲げ系)
- ⑥ 格子と伝統紋様 (" )
- ⑦ フレームと部分壁 (" )
- ⑧ 方柱付フレーム (" )
- ⑨ 耐震壁 (剪断系)
- ⑩ 組積壁 (" )
- ⑪ ログハウス (" )
- ⑫ 合成板 (" )
- ⑬ コアシステム (混用系)
- ⑭ 骨組み系BOX GIRDER (" )
- ⑮ 合成梁 (" )
- ⑯ 合成ラーメン (" )

以下これらの手法を具体的に解説する。

### ①アーチとケーブル

曲げ抵抗をもたない細い針金かひもまたは鎖を2点間にゆるくかけ渡して、中間各点に重錘を吊すと、ある折線を形づくったところで停止

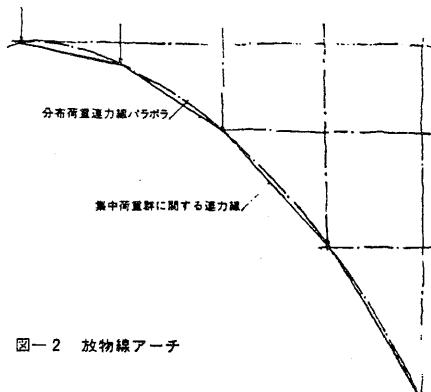


図-2 放物線アーチ

する。これは各部の引張力が荷重と釣合う位置に、自然に落ち着いた形である。

この針金あるいは鎖の形を、そのままモルタルまたは石膏で固めて、一定の圧縮力にも耐える断面形に成型した後、倒立させた形態がアーチで、同じ荷重群に今度は圧縮力で抵抗する。

この形は、等分布荷重のときは放物線になることが知られているから、等間隔に一定の集中荷重が加わるときも、折線の各折曲り点は放物線上にのっている。図-2

荷重の分布形が変るとアーチの形状も変らざるをえないが、アーチが一定の曲げ抵抗をもつならば、それがカバーできる範囲で荷重分布形の変動にも耐えうる。だが一般的には荷重分布に応じて正しい連力図を描いて形を定めるべきである。

木造でアーチを組む工夫のひとつとして、水平材で分割してアーチを短材で構成する方法が考えられる。図-3

このとき、各アーチは理論的には直線による折線の構成でよいのだが、曲線の方が美しい。曲線の直線への偏心のため二次的な曲げを生じさせるが、また逆に曲線アーチの方がしなやかに抵抗をすることにもなる。

水平材は直交材によって、横ぶれを拘束する必要がある。短い片持は燧で固める。

ケーブルとアーチを組み合わせるとレンズ状の一一本の合成梁ができる。イギリスの天才的土木技術者ブルーネルが、鉄橋に応用して成功したものである。

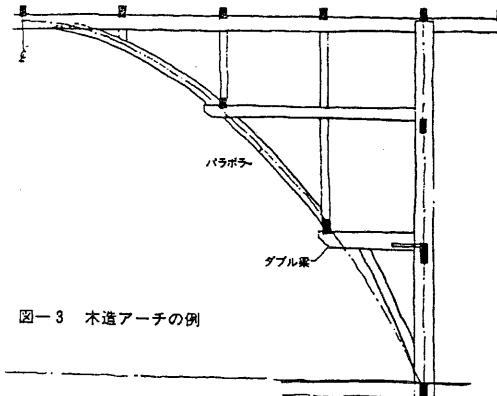


図-3 木造アーチの例

天龍の防腐加工施設の上家に、間伐材を利用して、この合成梁を実施した。ここは、間伐材を集積する場所であるから、上家に間伐材を利用しないという法ではなく、スパン23mを中間継手を2ヶ所設けて接続し、木製の合成梁とした。

図-4

**おっかけおおせんつ**  
中間の継手は追掛大栓継ぎとして、上、下弦材が一点に合致するところは、上弦の圧縮力を下弦の引張力として伝達できるよう、又首尻の仕口とする。すなわち下弦材を交点より外方へのばし、上弦材の小口が下弦材にくい込むようにするのである。束は上下弦材への簡単な枘差しでよいが、風圧時を考慮して、ボルトを添わせてある。横座屈防止に、下弦を丸鋼でつなぎ、端部で上弦に向けて結合し、力が閉じるよう工夫した。

## ②トラスとボウビーム

三本の棒の端部を互いに結合すると、三角形の板と同じくらいに剛な構面ができるることは古代から知られていた。これがトラスの原理で、三角の構面を次々と連結することにより、任意形状の合理的構面ができるのである。だ

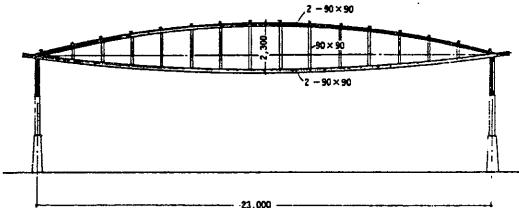


図-4 集成材利用の小屋組(合成梁)

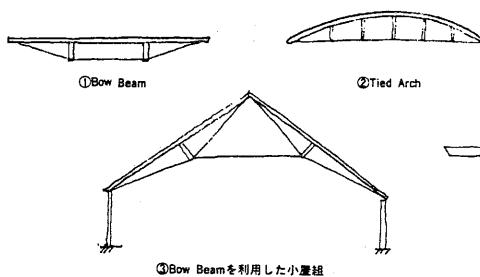


図-5 ボウビームとタイドアーチ

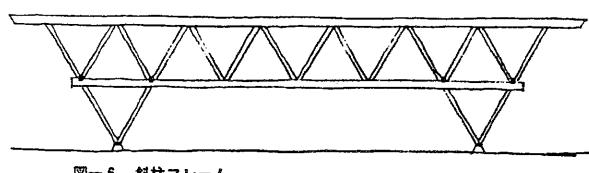


図-6 斜柱フレーム

が一方、位置本の細い梁が荷重群をうけるとき、その荷重点に束を設け、束の下端をつなぐ引張材を配置すると、軽量な合成梁が出来上がる。これをBOW-BEAMという。

BOWは弓で、その形状が弓に似ている事からきている。これはトラスのように斜材を要さないだけ、軽妙である。図-5

BOW-BEAMを弦材が引張材となるよう反転するとタイドアーチ(Tied Arch)になる。下に凸なボウビームと、上に凸なタイドアーチとは、原理的に同じだが、タイドアーチは水平力を受けるとき、曲げ応力を生ずるという差異がある。

ボウビームやタイドアーチを2方向に配すれば、有効な立体架構が完成する。

## ③斜柱・斜交格子

斜柱はバットレスや筋違として以外、あまり用いられていないが、斜柱の連続配置はトラス効果で剛な構面が得られる。引張力をうける材は通しの枘の上、割楔を施す。

クルトジーゲルが「現代建築の構造と表現」で一章をさいてV支柱は、軸力系と曲げ系の混用系であるが、材料に関係なくラーメンより有効な架構手法のひとつである。

軸組を構成する時、垂直な柱の全くない、斜柱を主柱とする構面が考えられる。窓や出入口は斜柱の合間に設ける。とくに空中を飛ばしたいとき、一層分の合成梁として働くから有効である。図-6

欄間や、壁面全体が細い材で斜交格子に組まれたものを見かけるが、あれはひとつの面材に近い抵抗を示す。意匠的な構造手法として、斜交格子はもっととりあげられてよい手法のひとつである。図-7

#### ④張索系システム

丸鋼のもつ抗張性を生かして在来の木造手法に加えると、有効な構面が数多く得られる。単純なプレスとしても、柱に圧縮力を生じさせるだけだから、筋違によって生ずる過大な引抜力をどう処理しようかと悩まなくてすむ。大開口を設けたい壁面にも丸鋼は有効である。対角状に丸鋼を張れないときは折曲げ点を設け、そこから柱梁の仕口へ向けて引張るのである。3本の丸鋼は全て引張力を生じて釣合う。仕口は厚くて大きい座金を特注して、めり込み応力度を極力小さくする配慮が必要である。図-8

軸組だけでなく、床組にも小屋組にも丸鋼は有効である。それ自体細くて目立たないから殆ど気にならない。むしろ規則的な張り方を考えると、リズムと緊張感が生まれる。

折線ができるということは、数を増すことによって曲線もできるということである。

#### ⑤単純梁と片持梁

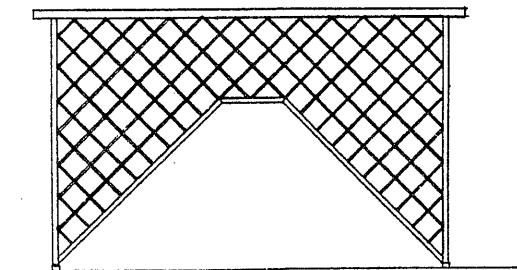


図-7 斜交格子

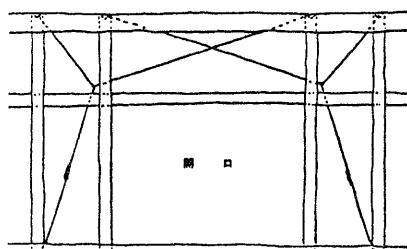


図-8 張索系システム

単純梁と片持梁はそれを組み合わせることにより、材料の有効な利用を可能にする。片持梁の先端を適当に延ばすことによって、単純梁の丈と長さを有効に選べるからである。ゲルバー梁はヒンジ点を適当に選ぶことによって、单一梁より効率を高めスパンをのばすことができるという原理であるが、木造の場合でも継手は柱芯から5寸の位置などと決めてしまわないで、最も適当な位置まではね出しを延ばす方がよい。

伝統建築にみられる持送りという手法は、美しくて合理的である。これを重ね梁などと組み合わせてゆけば、それだけでかなりのスパンの床を支えることが可能になる。片持梁の端部に加わる曲げはなるべく柱に負担させず、反対側の梁や下屋、あるいは庇などとバランスさせる方がよい。持送りの丈をとることによっても柱への曲げ負担は減らすことができる。図-9

#### ⑥格子と伝統紋様

江戸時代に、町家の窓格子は実に多様な発展

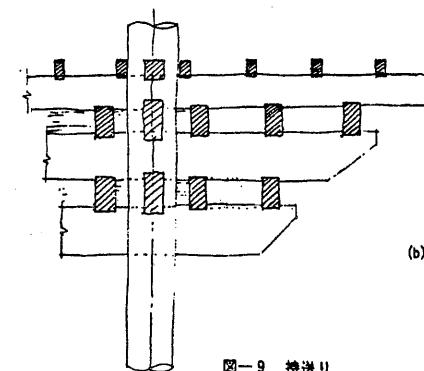
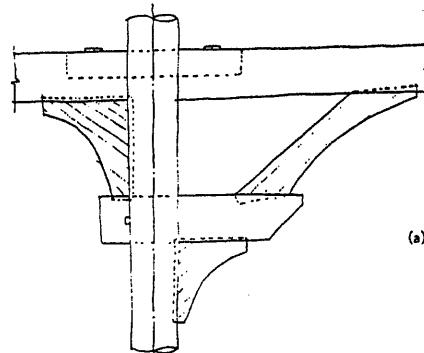


図-9 持送り

を遂げた。今も旧街道筋にその名残りをとどめているが、端正な直交格子は日本建築の意匠の基調をなしているように思える。伝統紋様や垣根の意匠などにも、構造的合理性が美しさをかもし出していると考えられるのがずいぶんある。

格子は、間隔をこまかくするほど細い材ですみ、より一層、面材に近づく。

軸組を通し貫と差し鴨居で固めると壁を仕上で隠すのが惜しいほど、美しい。断面寸法を充分とすれば、それ自体で充分の耐力は確保しうる。城郭のように8寸から1尺の柱と、梁に近い太い貫で構成すると多段ラーメンとして成り立っている。その上、厚い土壁の外壁があるのだから、わが国の城郭は、完全な耐震建築となっている。図-10

格子組は、主架構から製作に至るまで、もう一度見直されてよい、すぐれた架構手法である。その最大の長所は通し貫によって、全体が立体構造をなしている点にある。現行の部分筋違方式は柱に過大な引抜力を生じて、処置なしであるが、全体がからんでいるとき局部的応力集中という現象は生じないのである。仕口はくさびで抜け出しを防ぎ、どの部分も剪断力の伝達が保証されているから、金物など不要になる。部分筋違方式にだけ、過大な金物が必要となるのである。

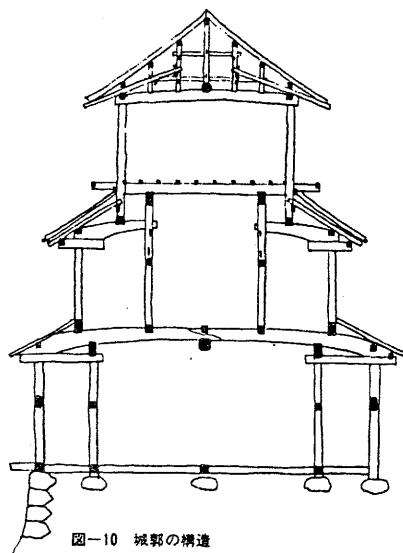


図-10 城郭の構造

#### ⑦フレームと部分壁

袖壁、腰壁、下り壁などの部分壁は、フレームと組み合わされるとき、有効な構造材となる。壁に一定の剪断抵抗が期待できる限り、それらは合成された柱や梁として働くからである。

例えば、腰壁はそれが水平力を受けて平行四辺形に変形しない限り、柱を拘束する作用をする。逆にいえば、開放的にしたいときは腰壁で固めればよいし、腰壁もとれないときは下り壁の拘束に期待すればよいのである。

わが国の伝統木構法は、事実としてこの原理により開放的空间を可能にしてきたのである。

壁の剪断抵抗と共に、水平材と柱の仕口が抜け出さないことが肝心で、車知やくさび、込栓などがそのために考案された。

柱の曲げ抵抗で耐える架構であるから、軸圧と曲げを受ける有効断面3/4（枘穴を差し引く）の柱として成り立てばよい。かなり大屋根でも4寸5分以上の柱で開放的空間は得られる。図-11

#### ⑧方杖付フレーム

曲げ系架構を実現しようとするとき、最大曲げを受ける部分で柱の側面に大きなめり込みを生じるのが木構造の泣きどころである。

それをさけるには梁のモーメントの腕を大きくする必要がある。その意味では下り壁も有効だが、方杖を設ける手法も、モーメントの腕を大きくして柱へのめり込みを緩和する方法とし

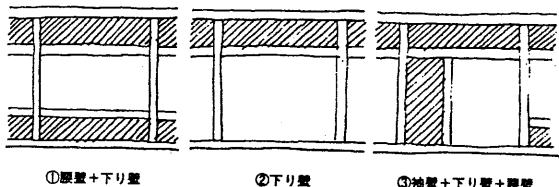


図-11 部分壁の利用

て威力がある。ただ無雑作に方杖を入れたのでは美しくないから、美しい方杖形を考えるなど、デザインしてみる価値はありそうである。

木構造は一般に圧縮力を主応力にしないと仕口が難しくなるから、引張をうける方向の方杖は無視する。方杖を変断面梁の端部として扱うと、曲げモーメントの分布に適合した合理的な形となる。こうすれば両方向に効く形状となる。

図-12

## ⑨耐震壁

剪断系は、一般的に剛性が高い。つまり変形しにくい、という特徴がある。力は剛性の高いところにあつまるという性質があるから、剪断系の耐震壁をバランスよく配置することによって、曲げ系であるフレームには殆ど水平力が流れず、大半を耐震壁が負担するという状態にすることができる。現行の木構法では柱・梁の仕口をピンと考えることにより、フレーム負担率はゼロという割りきり方をしているが、下り壁や腰壁をもつ柱は一定の曲げ抵抗をするのだから、100%耐震壁負担の考え方は極端にすぎる。そもそも、木構造を構造計算の対象から外してしまったところに木構法衰退の一因があり、剛性に立脚した応力解析が、木造の場合全く無視されているばかりか、曲げ系の成立そのものま

で否定されかねない。耐震壁に使う材料は、伝統構法では土壁と力板、現代構法では筋違入り壁と組積壁である。

## ⑩組積壁と木造

木造軸組を組み、外壁に石や煉瓦などの組積壁を施した構法が関東・東北に見られる。会津喜多方の煉瓦造や栃木の大谷石積などである。木造軸組の剛性に比べると、組積壁のそれは格段に高いから、組積壁付木造の剛性は殆ど組積造そのものに等しく、木組みは遊んでいる筈である。群馬の富岡製絲は腰壁に大谷石を積みその上に尺角柱とトラス梁で骨組を組み、外壁に煉瓦を積んだ、実に迫力ある構法である。柱は外に表わして漆喰塗りを施してある。明治五年、わが国棟梁の創造精神に富んだ力作である。真壁に煉瓦などの組積壁を組み込むと、完全な耐震壁となる。

## ⑪ログハウス

丸太を横使いにして積み上げ、相互のズレは丸枘が抵抗する、という一種の木製組積壁である。コーナーでは直交する材が互いにかみあうから、面外への移動は互いに拘束し合い、安定を保つ仕組になっている。

もともと寒い地方で発達した構法であるから、

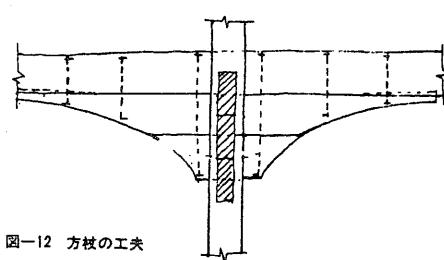
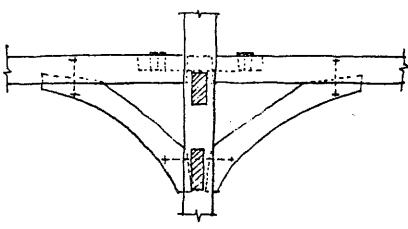


図-12 方杖の工夫

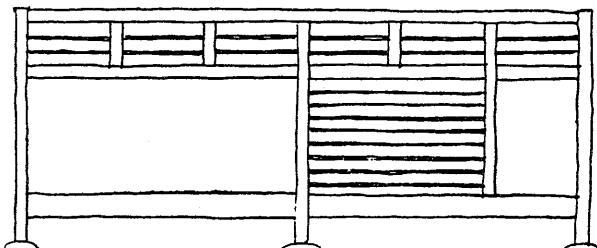


図-13 ログ+軸組

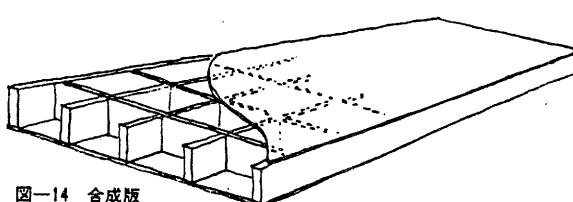


図-14 合成版

そのまま直輸入するのではなく、フレームに耐震壁として組み込む方法も充分考えられる。プランの自由性は、その方が高まるだろう。図-13

#### ⑫合成版

格子状に組んだ芯材に、両面からベニヤ板などの面材をとりつけて一体とするならば、面内剪断抵抗も大きく、面外曲げにも強い、軽量にして合理的なサンドウィッヂパネルができる。航空機に使われているハニカムパネルもこの一種である。

面板の突き合わせ部分のジョイントはスカーフジョイントまたはフィンガージョイントでこの接合法と、面板と芯材の接合部の剪断耐力の確保が合成版制作のポイントである。

合成版は床版にも壁版にも利用できる効率の高い軽量構造である。

面板の高度なジョイントが実施できない場合は小幅板を用いて、突き合わせ部を乱に配って散らすとよい。

合成版の原理は鋼あるいは鋼とコンクリートの組み合わせ、などによっても長スパン架け渡しを可能にし、威力を発揮する。図-14

#### ⑬コアシステム

木造に限らず有効な構法システムである。階段室や便所、浴室など、比較的閉鎖的な空間を構造コアとして利用すると、他のフレームの負担水平力を大幅に減らすことが可能になる。木造の場合、フレーム剛性が低いから耐震壁で囲まれたコアに大半の水平力を負担させると、他の部分を自由に開放的にすることができる。コアは木造壁でなければならないことはなく、鉄骨造でもブロック造でも、また鉄筋コンクリー

ト造でもよいのである。木造フレームの剛性と比較するとコアの剛性は格段に高いから、異種材料の混用に伴う剛性評価の難しさは存在しない。

鉄筋コンクリートのラーメンまたはカベをコアに選ぶと、木造の大きな変形を防ぐことができ、安心である。

#### ⑭骨組系 BOX GIRDER

長スパンの屋根の架構手法のひとつに、棟の位置に丈の大きな棟梁を両妻間に架け渡す方式がある。船の竜骨に相当するので、キール構法という。キールがあれば、これに小骨を架け渡すだけですむので、軽快な架構が誕生する。排気と彩光の越屋根をおく必要があるときは越屋根をBOX GIRDER にするとよい。

この BOX GIRDER は骨組で構成することになるから考えられる方式は、トラスかアーチが妥当であろう。アーチといつてもフィーレンデールに組み込んだタイプのものになるだろう。アーチの他にケーブルを組み込むのも効果的である。

アーチ作用の中心線に力板を配して、圧縮力を伝える機構にすることもできる。力学原理とその造形化のプロセスの間には、大きなへだたりがあり、デザインの自由性は大きいのである。図-15

#### ⑮合成梁

一本の丈高梁の代わりに、細い材 2 本を使って丈高梁の剛性に匹敵する合成梁にする方法がいくつか考えられる。

上、下弦材の間に、ズレ止めを入れることで一本の合成梁に高めることができる。ズレ止め

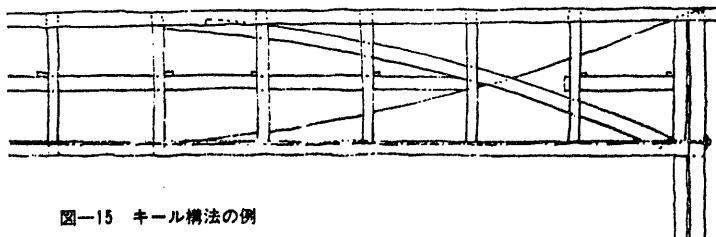


図-15 キール構法の例

の型としては、ジベル、かえる股、ラチス、アーチ、通し貫、などさまざまである。

合成梁は柱と協力して、有効な剛節架構、いわゆるラーメンを形成するので有効である。

合成梁は単独で用いても、ムクの梁より軽快で、合理的であり、また初期ムクリも与え易い。

図-16

#### ⑩合成ラーメン

筋違付耐力壁は、剛性の高い合成柱とみなすことができる。ところが現在、耐力壁は自立形式でしか扱われていない。つまり片持柱なのである。当然その固定法は地中梁へのアンカーボルト結合だが、土台を止めることはできても、柱を基礎に固定するのは難しい。とくに隅柱を押さえるのは困難である。合成柱の高い剛性と強度を生かすことができるのは、それに見合う高い剛性と強度をもった合成梁なのである。合成柱と合成梁とで合成ラーメンを構成するとき、

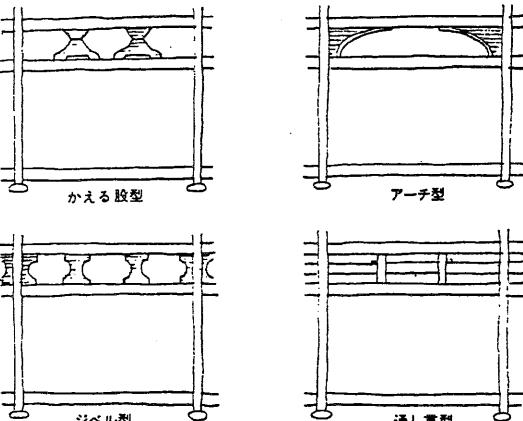


図-16 合成梁の例

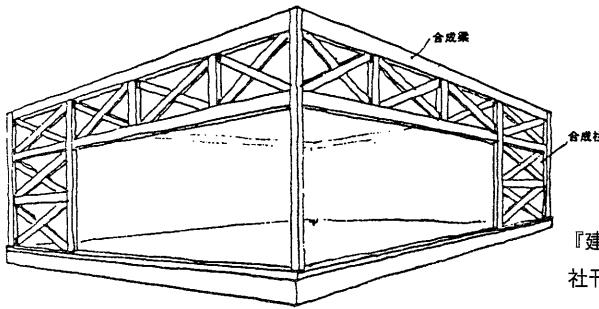
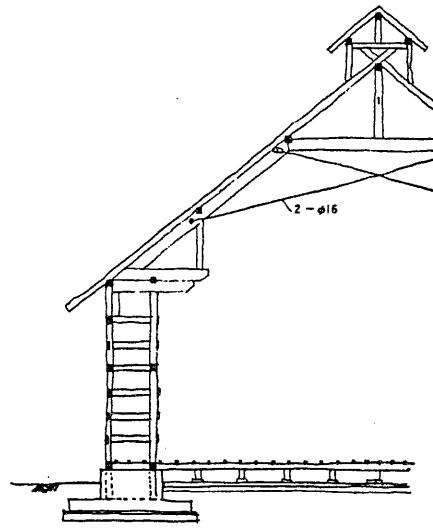


図-17 合成ラーメンの例

柱の基礎への固定は全く必要がなくなる。それは転倒モーメントに抗する復原モーメントの腕の長さが格段に大きくなるからである。この方向に発想を切りかえれば、3階建木造でも一切金物で押える必要がなくなる。合成ラーメンに切りかえるとき、立体架構が成り立ち、全体の転倒だけ考えていればよくなる。ヨーロッパの民家は筋違を装飾化しているというよりも一体化し、立体構造化しているという意味で合理的なのである。図-17

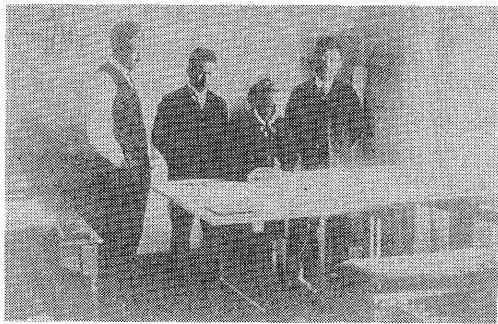
合成柱をそのまま表わしたいとき、斜違よりも通し貫の方が美しい。貫の断面を大きくすれば充分成り立つ。大空間の場合、柱脚が固定できると変形量が格段に小さくなる。それには角形鋼管に柱を入れ、周囲をエポキシ樹脂で固め、コンクリート基礎に打ち込んでしまうという方法がある。これは真木建設の田中文男棟梁の考案になるもので、現代計画研究所の設計になる四日市市の高花平保育園（57頁-63頁参照）の遊戯室に利用させていただいた。図-18



『建築設計資料40 木造の教育施設』 建築資料研究社刊より転載

# 遠藤新の住宅の空間構成の分析

鈴木久子



写真左2人目から：遠藤 新  
フランク・ロイド・ライト  
林 愛作

## ■はじめに

『神創りたまう如く我造る』・・・遠藤新は一九二二年〈大正11〉ライトの元を離れて遠藤新建築創作所を設立した時、この言葉を胸深くきざみこんだとある。以来、一九五一年〈昭和26〉六月逝去までの三十年間にやつぱやに多数の作品を生みだした。

遠藤新建築創作所は、昭和二十年の東京大空襲で数々の貴重な図面及び資料を失なっている。現在、百十軒にものぼる住宅作品を残していることは判明しているが図面は絶望的に少ないのである。今回、現存する遠藤の住宅作品の図面・写真・文章等の資料を可能な限り収集し、その空間構成のエレメントを整理してみた。すなわち、「屋根の型」「構造」「仕上げ」「換気塔の有無」「壁柱の形状」「パーゴラの有無」「暖炉の有無」「池の有無」等々である。(表1・2) しかしながら、わずか数枚の写真のみの住宅もあれば、図面

も写真も全くない。唯、この辺りに暖炉のある家が建っていたらしいとの情報のみの例もある状態で、収集は困難を極める作業である。だが、それを地道にこつこつと二十年以上もやり続ける人達が居る。都内の或る所に遠藤新設計の家があるらしいと云う情報が入れば、何をおいても駆けつける・・・・。そんな人達の努力に支えられて少しづつ集められた資料を年代順に配列図表化してみると遠藤新の住宅の空間構成の特徴が、その時代々によってかなり鮮明になりつつある。

まず、その1として大正末期を中心とした住宅作品、その2として昭和期の住宅作品に大別して、それをまとめてみたい。

## 目次——■大正末期の空間構成の特徴

1、住宅小品十五種にみる「たたずまい」

2、居間の上部には二階をのせない

3、壁柱の存在の意味するもの

## ■昭和期の空間構成の特徴

1、スレンダーからマッシュへ

2、タルキ構造から和小屋へ

3、真壁の日本間の意味

4、壁柱が消えるとき

すなわち、遠藤は、その1とその2の時期において全く対照的ともいえる空間構成を開拓している。その転換の契機となったものは何であったのだろうか？

表1 空間構成の諸データ（★印は現存するもの）

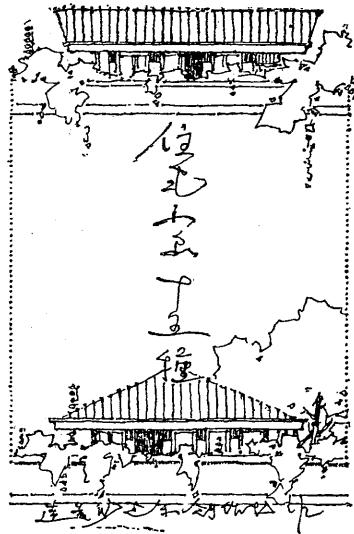
西暦	和歴	現存判定	作品名	場所	構造	屋根			換気塔	壁柱			バーコ	池	暖炉	和室	出典・資料	
						形	構造	仕上げ		外部	支柱回り	脇廻						
1922	大正11		大養木堂邸	東京信濃町														
1923	大正12		大久保邸	東京笹塚	木造平屋	切妻フラット	タルキ構造	瓦葺?	有	無	有	有	無	無	無	大壁?	住宅小品15種舎入の友 大正13年5月	
〃	〃		剣持邸	東京笹塚	木造平屋	切妻フラット	タルキ構造	瓦葺?	有	無	有	有	無	無	無	無	〃	
〃	〃		川島理一郎邸	神奈川鎌倉	木造二階	方形フラット	タルキ構造	瓦葺?	有	有	無	有	有	無	1	無	〃	
〃	〃	★	有川治助邸	神奈川鎌倉	木造二階	方形切妻	タルキ構造	柿葺	有	無	有	有	無	無	無	大壁?	〃	
〃	〃		杉島邸	東京中野														
〃	〃	計画	二軒建ての家	東京笹塚	木造二階	切妻	タルキ構造		無	有	有	有	有	有	無	無	住宅小品15種舎入の友 大正13年5月	
〃	大正12頃?		岡田哲蔵邸															
〃	〃		木部邸															
〃	〃		吉野作造邸増築															
〃	〃		海岸の小別荘	千葉県北條	木造平屋	切妻フラット	タルキ構造?		有	無	有	有	無	無	無	無	婦人の友大正12年 住宅小品15種舎入の友 大正13年5月	
1924	大正13		星島氏子供の家	岡山県	木造平屋	寄棟フラット	タルキ構造?	アスファルト	有	有	有	有	有	無	無	無	大壁	
〃	〃	★	上代邸	岡山県	木造二階	切妻フラット	タルキ構造?	瓦葺+アスファルト	有	無	有	有	無	無	無	1	大壁	
〃	〃		遠藤新自邸	東京代田	木造平屋		タルキ構造?			有	無	無	有	有	1	大壁	遠藤泰氏提供	
〃	〃		荒井賛男邸	東京代田														
〃	大正13頃?		柳沢雅休邸	東京代田	木造二階	方形切妻	タルキ構造?			有	?	?	有			?	婦人の友昭和3年6月	
〃	大正13		筒井邸	東京洗足	木造二階	切妻フラット	タルキ構造?	瓦葺?	有	有	有	有	有	無	1	大壁	婦人の友大正14年1月 住宅小品15種舎入の友 大正13年5月	
〃	〃	★	安成邸	東京保谷	木造平家	寄棟	タルキ構造?	瓦葺?	無	無	有	有	無	無	無	無	住宅小品15種舎入の友 大正13年5月	
〃	〃		田原邸	東京笹塚	木造二階	方形フラット	タルキ構造?	瓦葺?	無	無	無	有	有	無	1	無	〃	
〃	〃		相原邸	神奈川鎌倉	木造二階	方形寄棟	タルキ構造?	瓦葺?	有	有	有	有	有	無	1	大壁	〃	
〃	〃		大沢邸	東京清瀬	木造二階	切妻フラット	タルキ構造?	瓦葺?	有	無	有	有	無	無	2	大壁	〃	
〃	〃		稻田邸	東京青山	木造二階	フラット	タルキ構造?	アスファルト	無	無	無	有	無	無	1	大壁	〃	
〃	〃		岡田氏の書斎															
1924	大正13	★	茅野賛々邸	神奈川逗子	木造二階	切妻	タルキ構造?		?	無	無	無	無	無	1	無	南洋哲也氏季刊カラム 南洋の家	
〃	〃	★	萩原摩吉邸	東京三宿	木造二階	フラット	タルキ構造	アスファルト	無	有	無	有	有	無	無	大壁	住宅小品15種舎入の友 大正13年5月	
〃	〃	★	山邑佐衛門邸	兵庫県芦屋	RC造四階	フラット	RC造	アスファルト	無	無	有	有	有	有	4	大壁	基本設計下、L. L. ライ	
1925	大正14		羽仁吉一邸	東京西池袋	木造二階	方形 切妻	タルキ構造	鋼板瓦葺	有	有	有	有	有	有	無	1	大壁	住宅建築1983年2月
1925	大正14頃?		河越子爵邸														婦人の友大正14年1月	
〃	大正14		山田秀雄邸	東京高円寺														
〃	〃	★	近藤賛二別邸	神奈川川上堂	木造二階	方形寄棟	タルキ構造	栗こば葺	有	有	無	有	有	有	?	1	大壁	藤沢市提供
〃	〃		野村浅吉邸	東京大久保														
〃	〃		荒井哲郎邸	東京駒込														
1926	大正15	★	石本邸	東京千石														
〃	〃	★	石橋邸	千葉県														
〃	〃	★	大正末期頃?	山内二郎邸														
1927	昭和2	★	石原謙邸	宮城県仙台	木造二階	方形 寄棟	タルキ構造		有	無	無	有	有	有	1	大壁	的場直矢士提供	
〃	〃		出口一重邸	東京田園調布	木造二階				無	有				有	無		昭和32年焼失、施工秋山組	
〃	〃	★	加地利夫別邸	神奈川葉山	木造一部瓦C-階	方形 寄棟 切妻	タルキ構造	鋼板葺	有	有	有	有	有	有	4	無	加地信氏提供	
〃	〃		黒崎貞彦邸	東京東久留米	木造二階	切妻	和小屋	天然ストレート裏瓦	無	無	無	無	無	無	無	真壁	婦人の友昭和2年4月	
〃	〃		高橋泰郎邸	東京東長崎	木造平家	切妻 寄棟	和小屋	セメント赤瓦葺	無	無	無	無	無	有	無	真壁	〃	
昭和初期?	★	井上匡四郎子爵邸	神奈川葉山	木造二階	切妻	和小屋?	瓦葺	無	無	無	無	無	無	無	1	?		
1927	昭和2頃?	★	中村重安邸改築	東京渋谷	木造二階	寄棟									1		遠藤泰氏提供	
〃	昭和2		三澤邸	東京杉並														
〃	〃		西川邸	東京成城														
1928	昭和3		森久保寿邸	東京駒沢	木造二階	切妻	和小屋	日本瓦葺		無	有	無		有	1	真壁	井上氏伝聞	
〃	〃	★	矢田部勤吉邸	東京吉祥寺東	木造二階	切妻	和小屋	亜鉛板瓦葺	無	無	無	無		無	1	真壁		
〃	〃	★	高瀬莊太郎邸	東京西荻窓	木造二階	方形 切妻	和小屋	瓦葺		無	有	無						
1929	昭和4		羽仁吉一邸	東京東久留米	木造二階	方形 切妻	和小屋	瓦葺	無	無	無	無		無	1	真壁	婦人の友昭和4年9月	
〃	〃		小松邸	東京駒込														
〃	〃	★	浮田和民邸	神奈川茅ヶ崎														
1930	昭和5		渋田見邸	東京田園調布	木造二階	方形 切妻	和小屋	瓦葺	有	無	有	無					遠藤泰氏提供	
〃	〃	★	渡辺保邸	東京恵比寿	木造二階	方形	和小屋?	瓦葺							有			
1931	昭和6	★	加地利夫邸	東京白金	木造二階	方形寄棟	和小屋?	瓦葺		有	無	無		有	6?		国際建築昭和8年9卷	
〃	〃	★	石原謙別邸	板木新那須	木造平家	寄棟	和小屋	須賀川瓦葺	無	無	無	無		無	1	真壁	住宅建築1989年2月	
〃	〃		遠藤新自邸	東京南長崎	木造平家	切妻	和小屋	瓦葺	無	無	無	無		有	無	?	遠藤泰氏提供	

表2 空間構成の諸データ（★印は現存するもの）

西暦	和歴	現 刻定	作品名	場所	構造	屋根			換気塔	壁柱			パーコ	池	暖炉	和室	出典・資料
						形	構造	仕上げ		外部	玄関回り	窓廻					
〃	〃	★	山本節次郎邸	東京築の宮	-	瓦葺	無	無	無	無	無	無	無	無	真壁	小塙完治氏提供	
〃	〃	★	小塙 完治邸	東京三層	木造平家	寄棟	和小屋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
〃	〃	★	小林 濱邸	東京下落合	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
〃	〃	★	加藤 邸	大蔵住吉	木造一階RC 二階	方形 寄棟	和小屋？	瓦葺	無	無	有	無	無	有	5	真壁	遠藤栄氏提供
1932	昭和7	★	山 岸 邸	東京下北沢	木造二階	方形切妻	和小屋	瓦葺	無	無	有	無	無	無	1	真壁	山岸氏提供
1932	昭和7	久 山 邸	東京国分寺	木造二階	方形 寄棟	和小屋？	瓦葺	無	無	有	無	有	無	無	2	真壁	遠藤栄氏提供
〃	〃	★	田中富士雄邸	東京保谷	木造平家	切妻	和小屋？	瓦葺	-	-	-	-	-	-	?	1	婦人の友
計画	児島喜久雄邸	宮城県仙台	木造二階	方形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	遠藤栄氏提供
〃	〃	★	小町屋 操三郎	宮城県仙台	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
〃	〃	今 泉 邸	東京小石川	木造二階	方形	和小屋？	瓦葺	無	無	無	無	無	有	1	真壁 ?	国際建築昭和8年第9巻	
1933	昭和8	白井 齊 次郎	東京世田谷代代木	木造二階	方形 切妻	和小屋？	瓦葺	無	無	無	無	無	無	無	1	真壁	住宅建設1983年2月
〃	〃	★	恩地孝四郎邸	東京荻窪	木造二階	方形 切妻	和小屋	瓦葺及鐵板 瓦棒	無	無	無	無	有	無	無	真壁	恩地孝四郎邸提供
〃	〃	京城 の 家	韓国ソウル	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
〃	〃	皆 川 邸	旧満州新京	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
〃	〃	坂 谷 邸	旧満州新京	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
〃	〃	松 木 邸	旧満州新京	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1934	昭和9	兵 藤 邸	東京目白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
〃	〃	吉屋信子別邸	長野軽井沢	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
〃	〃	★	旧滿州中央銀行 新蔵原	二階建	寄棟 切妻	-	瓦葺	無	無	無	無	無	無	無	6	大壁	満州建築雑誌
〃	〃	★	旧滿州中央銀行 新蔵原	二階建	寄棟 フラット	-	瓦葺	無	無	無	無	無	有	5	大壁	〃	
〃	〃	★	旧滿州中央銀行 理賃部	二階建	寄棟 フラット	-	瓦葺	無	無	無	無	有	無	4	大壁	〃	
〃	〃	★	旧滿州中央銀行 課長室	二階建	寄棟	-	瓦葺	無	無	無	無	無	無	無	1	大壁	〃
〃	〃	★	旧滿州中央銀行 副課長室	平家	?	-	瓦葺	無	無	無	無	無	無	無	1	大壁	〃
〃	〃	★	旧滿州中央銀行 集合住宅	二階建	?	-	瓦葺	無	無	無	無	無	無	無	1	大壁	〃
〃	〃	江 川 邸	大阪府	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1935	昭和10	羽仁 五郎邸	東京東久留米	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
〃	〃	久保貞次郎邸	東京牛込	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	〃
〃	〃	★	川久保 勝吉邸	神奈川県二宮	木造二階	方形 寄棟 切妻	-	瓦葺?	無	無	無	無	有	1	真壁 ?	-	-
〃	〃	品川 郡 増築	東京代々木	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1936	昭和11	池 口 邸	東京東久留米	木造二階	方形切妻寄棟片流れ	和小屋	瓦葺	無	無	無	無	有	有	1	真壁 ?	-	-
1937	昭和12	★ 小宮 一郎邸	東京保谷	木造平家	切妻	和小屋	瓦葺	無	無	有	無	無	無	1	真壁	住宅建築1989年2月宮井昭隆氏提供	
〃	〃	吉屋信子別邸増築	アトリエ	東京国分寺	木造二階	切妻	和小屋	瓦葺	無	無	無	無	無	無	1	真壁	建築知識昭和12年第3号第3号
1938	昭和13	田 河 水 浩邸	東京荻窪	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
〃	〃	松 井 真 邸	東京東久留米	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1939	昭和14	吉屋信子別邸増築	井原川県飯倉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1942	昭和17	久保貞二郎邸 ギャラリー	橋木県真岡	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1946	昭和21	木 村 郡 増築	千葉県	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1948	昭和23	内 田 邸	東京四ツ谷	木造平家	切妻	和小屋	瓦葺	無	無	無	無	無	無	無	無	真壁	遠藤栄氏提供
〃	〃	横 井 邸	東京四ツ谷	木造平家	切妻	和小屋	瓦葺	無	無	無	無	無	無	無	無	真壁	〃
〃	〃	本 田 里 平 邸	神奈川県保土ヶ谷	木造平家	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1949	昭和24	斎藤 良 雄 邸	東京武蔵野	木造平家	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	有	真壁	-
1950	昭和25	安 信 邸	東京都	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
福 興 邸	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
津 島 邸	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
片 山 哲 邸	神奈川県片瀬	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
阿久津邸医院借用	東京本郷	片流れフラット	-	-	-	-	-	有	無	有	有	-	-	-	-	-	建築世界大正16年第8号
★ 江 川 邸	大阪府和泉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
里 見 邸	神奈川県二宮	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
村 津 邸	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
内 池 邸	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
酒井祐之助邸	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
中 川 一 政 邸	東京永福	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
吉田さんの家	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
★ 垣 本 邸	東京荻窪	木造平家	切妻	和小屋	瓦葺	無	無	有	無	-	-	-	-	-	-	-	-
明 石 邸	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

## ■大正末期の空間構成の特徴

### 1、住宅小品十五種にみる「たたずまい」



遠藤新は、一九二四年〈大正13〉「婦人の友」5月号に『住宅小品十五種』を発表。それは正に遠藤の建築的思想の原点とも云える作品群であった。廿坪から五十坪程度の小住

宅ばかり十幾種の作品のきわだつ特徴は、空間構成の明快さであった。

例えば、上代邸は、高いもの・低いもの間に低い広間が展がると云う「三間巾の家」の基本型とも云える構成であるが、敷地は、五間巾に十五間奥行と云う当時としては非常に条件の悪いものであった。そこでまず、『建物が三間巾をこさぬ様にし、一番初めに三間四方の一団を北の通りに近く取る。この中に、茶間、台所・女中・風呂・洗面・二階への階段・便所を入れて仕舞う。』『あとは八畳床押入付の書斎を離れに置いて、その連絡を二間巾の広間で取るとする。広間は四間・その一隅を玄関にする。』(遠藤新作品集<sup>※1</sup>・住宅小品十五種・上代氏の家)と遠藤は述べている。

広間の西側には要ともいえるどっしりとした暖炉が置かれ、落ちついた居心地の良さを

### はしがき

まづ地所を見る

地所が建築を教えて與れる

いかに建築が許されるか

いかに生活が許されるか

そしていかに生活が飛びられるか

其をそこの自然から学ぶ。

其所に土も石も草も木もある

そこから建築がのびて来る。

其を逆の方から云う。自然から材料を貰う。

自然に合せて物をつくる。そしてその作品を

ひつさげて人間諸共、母なるまたは父なる自然に帰る。

その作品建築。

部分が相済す美しさ、それがまた全体に参ずる美しさ。そして更に全体が部分に及ぶ美しさ、其美しさと眞実。

建築を対自然の、そして対人間の厳肅なる事実として、必要が必然性を帯びて具象する創

作の一元境。  
建築家は此の天領に住する。  
そして建築はそこから生れる。  
彼は全幅の感激をこの天領に呑吐<sup>どんと</sup>する。  
そして眉をあげていう  
「神創りたまう如く我造る」と。  
自然に参ぜむとするのは熱意である。

自分は、近世を貫いて建築界の第一人者ライト氏の下に六年、此程帝国ホテルを退いて一本立になつた時、この言葉を胸深くきざみこんだ。  
爾來一年と三ヶ月。  
こゝに、この間に仕あげ、又は仕かけてある仕事の中、小住宅廿坪から五十坪の程度のもの十幾種を取り出して婦人之友によせる。

「住宅小品十五種」はしがき

つくり出している。更にその三間角のブロックの上に頭をもたげるよう和室がのび、大地と平行にのびた一文字のプランの上に一部、二階がのっているのではなく、まさに大地から垂直に二階が立ち上がっているのである。

遠藤は、この上代邸を基礎として「三間巾の家の変化」(図2)「一文字の家」(図3)「一文字の中央をふくらました家」(図4)「他の要素と複合した型」「T字への派生」(図5)とさまざまな展開を見せる。それらは、いずれも遠藤の住空間に特徴的な相対する要素のコントラストが醸し出す流れるような律動感が奥行きのある表情とのびのびとした雰囲気をつくり出している。

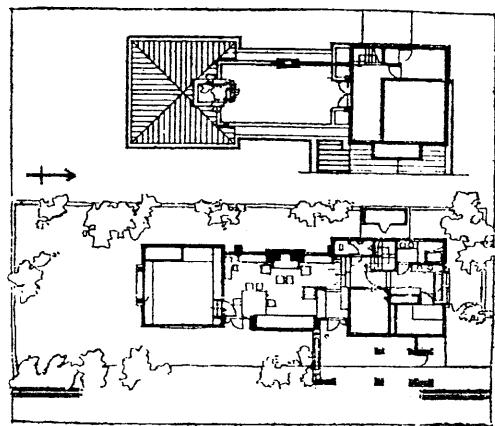


図1 上代邸一階、二階平面図

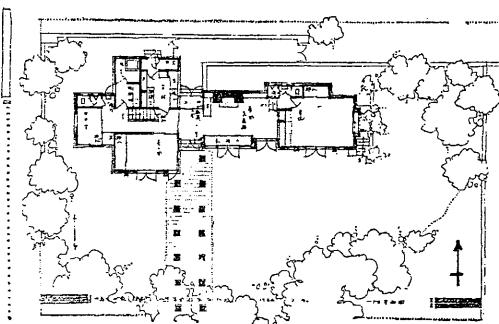
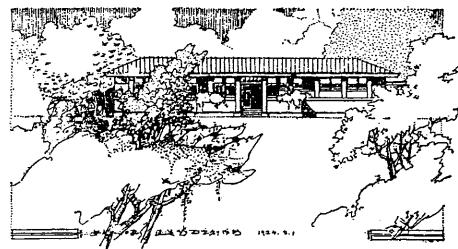
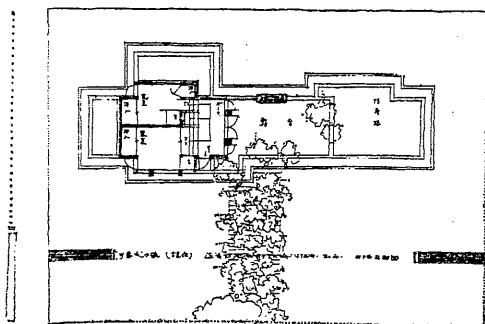


図2 川島邸一階、二階平面図

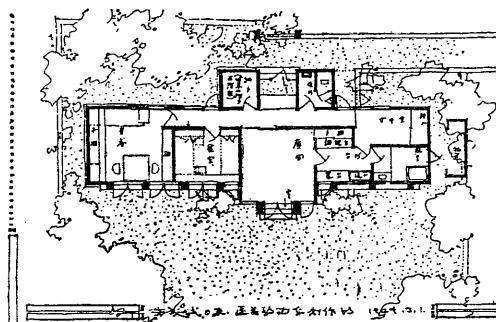
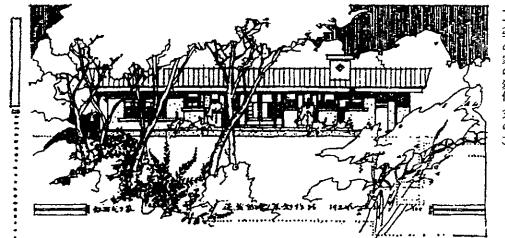


図3 安成邸立面図、一階平面図



一文字の家の変化(4)  
119

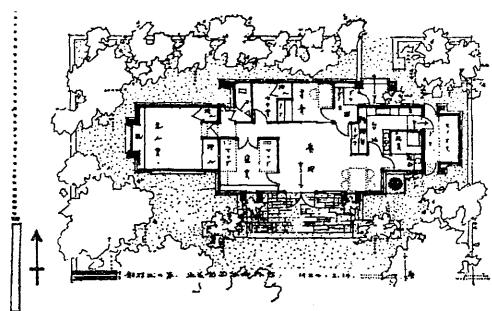


図4 剣持邸立面図、一階平面図

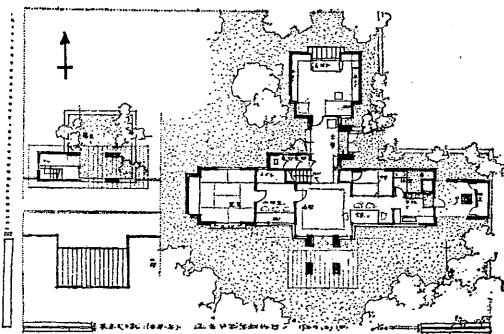
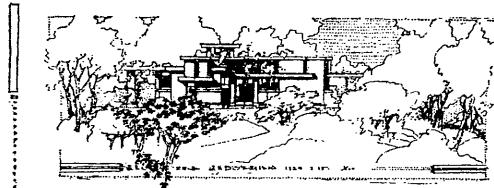
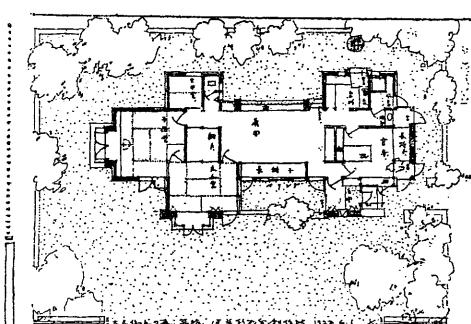
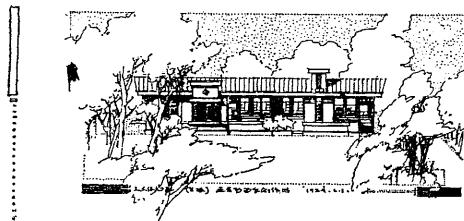


図5 萩原邸立面図、一階平面図



大久保邸一階、二階平面図

## 2、居間の上部には2階をのせない

この時期の遠藤の建築作法は、一団にまとまれた住宅の五臓六腑ともいえる茶の間・台所・風呂・洗面・便所等の塊と反対の端に位置する離れ（座敷等）を連結する場所に広い部屋を取る。それは上代邸・川島邸・有川邸・筒井邸・相原邸・大沢邸の例を確認することができる。『これ等の大きな部屋は、充分に庭と融け合って誠にひろやかな心地良い自然のまとまりを見せる』（遠藤新の作品集より引用）従ってそのひろやかな広間の上に2階はつくらないのが際だった特徴としてあげられる。

後に武藤章が「リビングルームに自由を求めて」（住宅建築一九八十年十月号）の中に

『個室が小ぢんまりとして閉鎖的で静的な空間であるとすると、リビングルームは大きく開放的で動的な空間であり、両者が一体となって住空間が構成されると考えるのである。

このような性格をリビングルームの空間にもたせるために、私はまずリビングルームの上に2階をのせないと云うことを原則している』の一文を求めて私は氏が遠藤新の「住宅小品十五種」に少なからぬ啓発を受けていたことを直感した。更に『もし2階があると、リビングルームの空間から垂直方向に展開する自由度が失われてしまうからである』と続いている。

だが後になってスレンダーな平面形態が、ぼってりとしたマッシュブなものに変わると共に遠藤新は、そのひろやかな広間の上にも2階をもってくる事となる。

### 3、壁柱（構造的要素を併せ持つふかし柱）の存在の意味するもの

大正期の遠藤の住宅作品には、構造的要素を併せ持つふかし柱とも云える壁柱が多数存在する。これはプランをみれば一目瞭然であるが、モルタル塗りの「太い柱」と云うか、それとも「幅の狭い壁」と云うか、本文ではそれを『壁柱』と云ういい方で統一することにする。この時期、特にこの太い壁柱の存在の有無を考察することは重要な意味を持っている。

壁柱は、①外なる建築を構成する壁柱（写真1）、②内部、特に開口部とからんでいる壁柱（写真2）、③アプローチ、玄関廻りに配

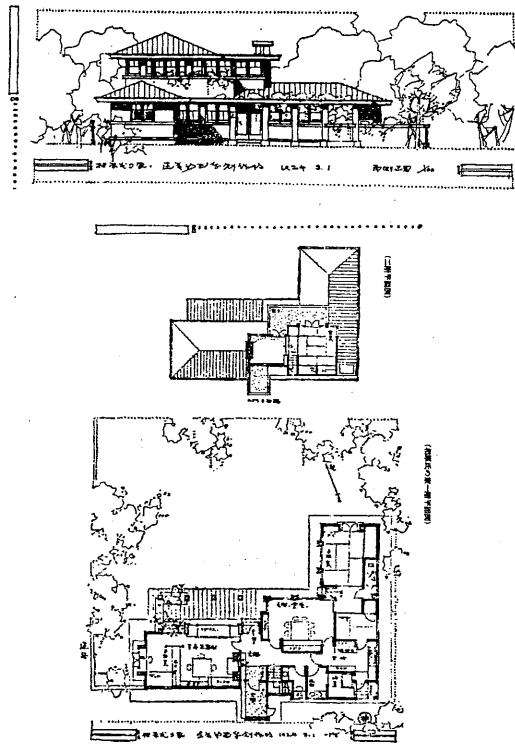


図6 相原邸一階、二階平面図、立面図

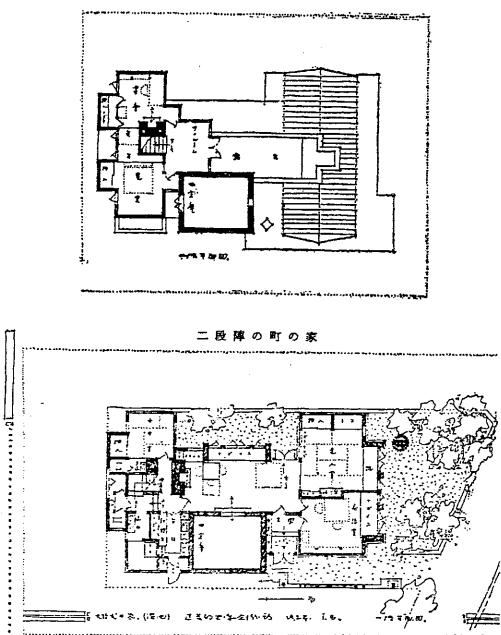


図7 大沢邸一階、二階平面図

された壁柱・と大きく三タイプに分けられる。大正末期においては、三タイプ全部存在する住宅が多数みられる。

この壁柱は何を意味するのか。あるいはどんな役割を持っているのだろうか？『無の探勝』（季刊カラムNo.92：南迫哲也）という文章の中に次のような一節がある。

『これらの周辺からの視線が、室内の集中性を損なうような場合には、必ず使われているようである。つまり心理的に無を寓する必要が、この「布柱」（本文では「壁柱」の意）を置かせたのだ』『無を寓する壁の意味は、単なる「見える・見えない」ことによる心理的な効果だけではなさそうに思われてきた。

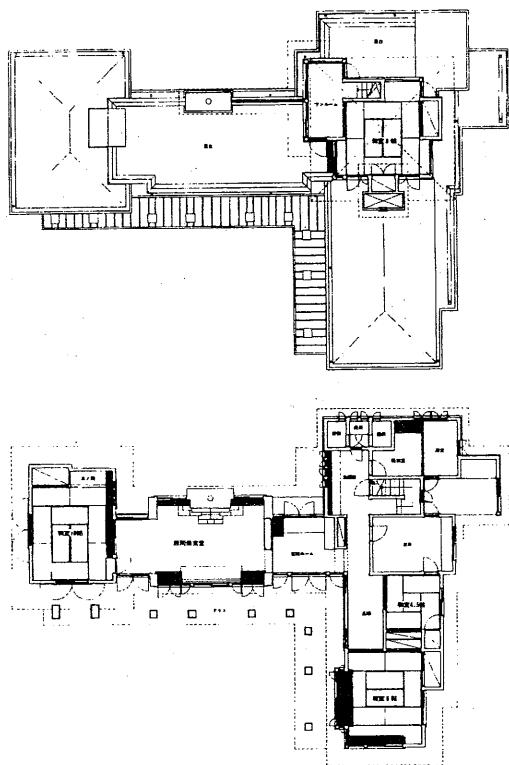


図8 近藤賢二別邸一階、二階平面図

この布柱はどうやら室内の暖炉との対応において考えられているように思われて仕方がないのである』これは誠に得た洞察と云える。

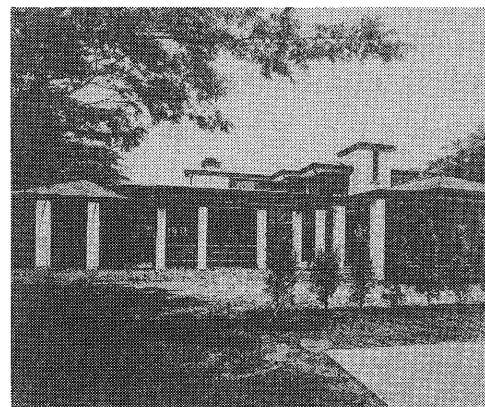


写真1 近藤賢二別邸

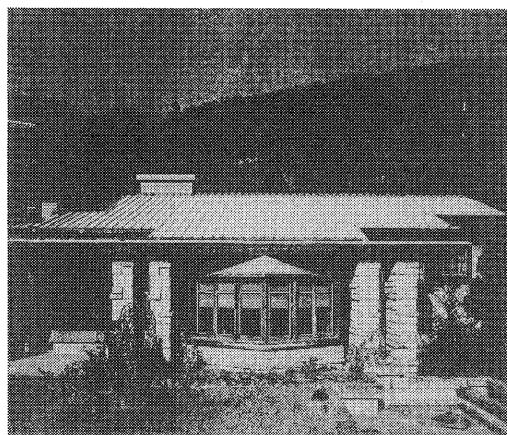


写真2 加地利夫邸別邸

浅い奥行きのスレンダーな平面型・どっしりとした暖炉と躍動感にあふれた窓と壁柱の配置・延々と続くパーゴラの太い壁柱・・・試みに旧近藤邸（図8）のプランを取り出し、その壁柱の部分に赤鉛筆で色を落してみると、そして更に目から距離をおいて、そのプランをながめてみるとする。一般の壁や柱に比較してその太さに驚く。と云うより、少し太すぎるのではないかとさえ思う壁柱が何ヶ所も目立つ。しかし、それが立面として立ち上った場合、必ずしも不自然なボリュームではない。それどころか、いかにも自然なボリュームとしてそこに存在するのである。

しかしながら、小品十五種をはじめとしてあれ程、多くみられた壁柱がある時期を境に忽然として消えることになる。

### ■昭和期の空間構成の特徴

#### 1、スレンダーからマッシュへ

大正末期のスレンダーで明快な平面形態から、昭和期に入ると梁間方向に奥行きのあるマッシュな平面形に変化する。その発端となる作品が一九二七年〈昭和2〉の石原邸（図9）であると云える。

更に白井喬二郎（図10）・恩地孝四郎邸（昭和8年）・池口邸（昭和11年）のように大きく一塊にまとめられた母屋と書斎又はアトリエを渡り廊下や土間で連結する、分節型の平面形も現れる。

分節型については、「小品十五種」の萩原邸（図5）にその兆しがなくもないが、奥行

きの深いプランへの変遷については、注目すべき点であると云える。

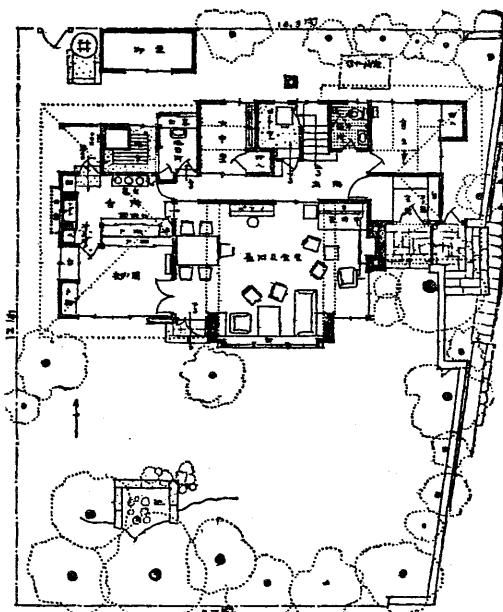
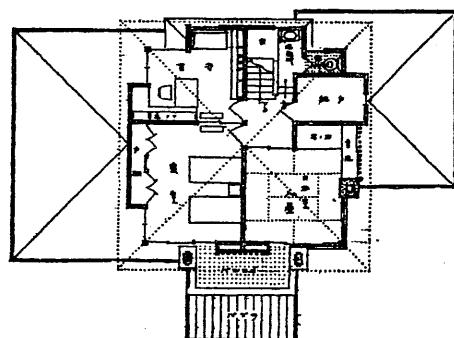


図9 石原邸一階、二階平面図

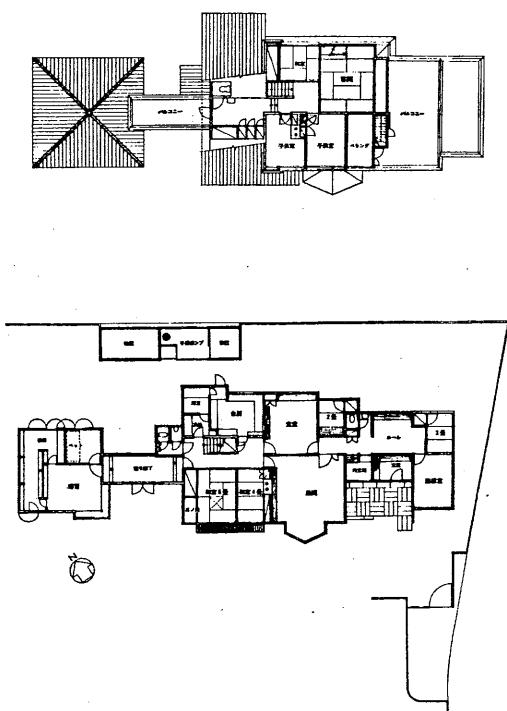
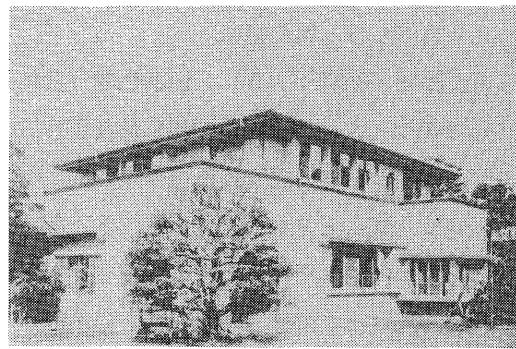
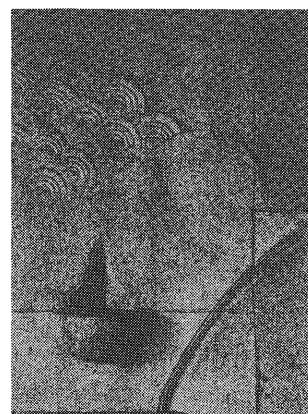


図10 白井喬二邸一階、二階平面図

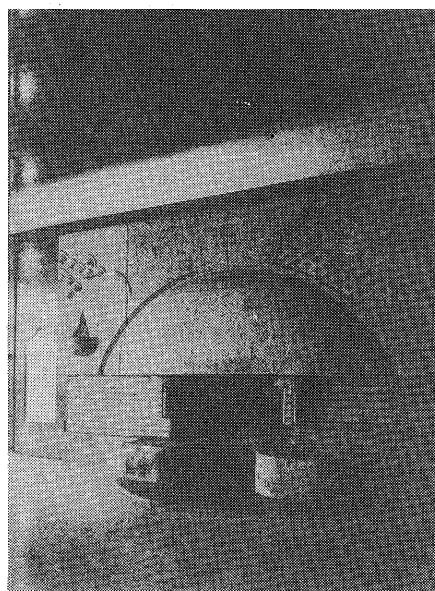


\*写真3



## 2、タルキ構造から和小屋へ

大正末期の屋根は、フラットがあるいは非常に緩い勾配の切妻か、又はおおらかな寄棟で仕上は軽やかな柿葺や金属板が使われていた。しかし昭和期の住宅は重量感のある瓦が葺かれる傾向が顕著になり、小屋組はタルキ構造から和小屋に変化する。具体例として加地利夫邸・白金台（写真3）一九三一年（昭和6）・今泉邸・一九三二年（昭和7）等があり、それはいかにも豊かな生活の表情を内包するどっしりとした姿であった。云うまでもなく、タルキ構造から和小屋への変化は、平面形態の変化に対応した必須の要素であったと云える。



加地利夫邸（白金台）居間暖炉とレリーフ

住宅建築1989年2月号より

### 3、真壁の日本間の意味

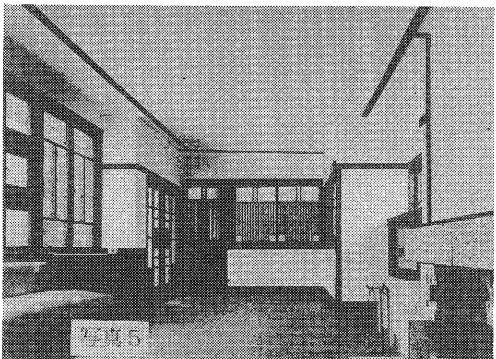
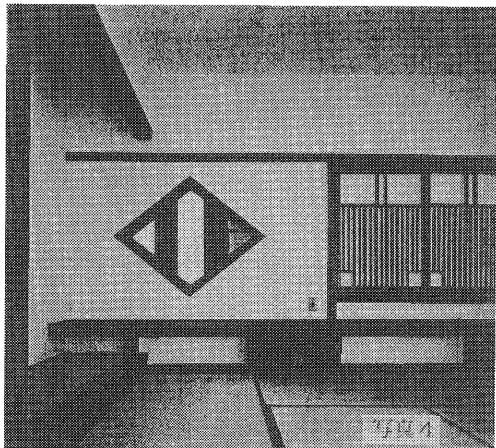
旧近藤邸（写真4・5）・旧羽仁邸（共に一九二五年・大正14）の内部に代表されるように、畳の部屋と椅子の部屋の壁を共に大壁として、壁も天井も同じ仕上げで塗り回す空間構成の作法・そこに骨太の長押や枠を廻し、建具に至るまで統一された和と洋が混然一体となる有様は、遠藤新のつくり出した独自の空間と云える。

大正14年と云えば、まだラジオも電話もなく、風呂には薪が使われていた。急速に歐米の影響を受けて生活のあらゆる面での変革が叫ばれていた時代性と又、その前々年の関東大震災からの立ち直りの息吹きとが相まって近代化・洋風化の大きな波がうねっていた。

しかしながら昭和期になると、大壁の和室が消え、伝統的な形式の踏襲ともいえる真壁の日本間が出現する。更に児島善三郎画伯アトリエ（一九三七年・昭和12）に至っては、書院造りの日本間となる。

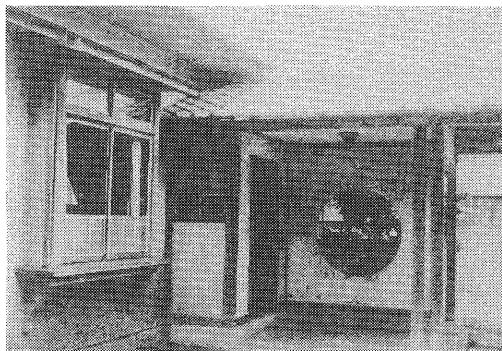
遠藤新は、「八畳床押入つき」（遠藤新作品集）の中で日本の建築の良さをくりかえし述べている。『日本間には、はっきりと方向がある』と云い、それは『審美上の問題に限らず、何にまれ、大切な要素です』『いわば飾る所を飾ればよい。くすぐり所をくすぐればよい』と云う。又、日本間で『大切な建築要素は中心をつくらないこと、求心的手法がない』ことで近来の西洋建築は局所的、求心的なるが故に見通しがなくなったと・・・日本の風土と生活に即した独自の建築を創るために遠藤新が如何に苦労していたかが推測で

きるのである。



### 4、壁柱が消えるとき

大正末期に多用された壁柱は、昭和期において、外なる建築を構成する壁柱①——これはパーラゴと絡んで連続する列柱となる例が多くかった——は完全に消え、開口部に絡んだ壁柱②も加地利夫別邸（一九二七年・昭和2）を最後にその姿を消す。唯一、玄関廻りに配される独立性の高い壁柱③のみが、デザインエレメントとして残り、その変種として小宮邸（写真6）（一九三七年・昭和12）玄関廻りの2本の裸柱、又は久山邸（一九三二年・昭和7年）・加地利夫邸・白金台（昭和6）の玄関柱として存在することとなった。



小宮邸

### ■結びに

遠藤新は、物と物との関係性と相対する要素の存在感の強弱を配することによって空間に方向性と豊かさをつくりだした。遠藤の建築哲学を探り、その建築作法を考察することは、他ならぬ私自身のつくる建築空間に必ずや実証的な重い意義を与えてくれると信じるものである。

又、本文の表題は、あえて住宅作品の空間構成に限定したが、帝国ホテル建設の為、来日したF・L・ライトが一九二一年（大正10）ほぼ同時期に遠藤新と共に作の型で設計し、

現存する『自由学園明日館』（図11）は老朽化し、今や危機に瀕している。明日館は現在、日本に残るライトの建築の中で設計当初の用途で今なお実際使われている唯一の建物である。

拙文を読まれた一人でも多くの方がぜひとも目白の地に足を運ばれ、あのすばらしい空間に浸って下さることを切に望む。

\*表1、表2 拙稿(共同)：遠藤新の研究 (23) (24)

日本建築学会学術講演梗概集

(1995年)

- \*1 遠藤新作品集・中央公論美術出版
- \*図1～10 遠藤新作品集より引用
- \*図11 自由学園明日館実測図  
発行：日本建築学会歴史意匠委員会
- \*写真1 住宅建築1981年10月号
- \*写真2 住宅建築1981年10月号
- \*写真4、5 住宅建築1981年10月号

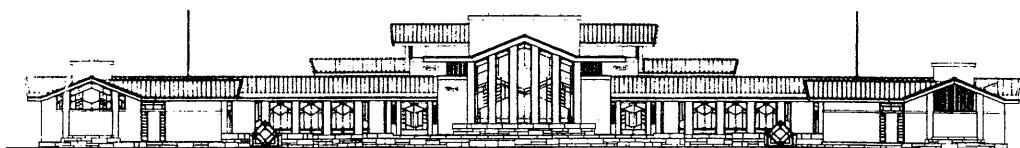


図11 自由学園明日館立面図

# 旅の画帖

## 初めて韓国に行った時のこと

絵と文　吉田　桂二

15年ばかり前のことになる。初めて韓国に行った。ヨーロッパには行ったことがあっても、日本の民家を見て廻っていて、ついお隣りの家の家がどうなのか、何も知らないのに気がついて愕然としたのがキッカケだった。

ヨーロッパを見ているだけなら、彼等との違いは歴然だから、日本の文化は独自だ、などと嘯いていられる。しかし本当に独自なのか、中国文化圏の中で推移してきた歴史からすれば、日本を巡るアジアの家々を知らなければ何も言えないはずだ。こんな思考を辿った末の韓国行きだった。以後は脱兎のごとくアジアの国々を訪ねる旅が始まった。

だから初めての韓国の旅は、アジアの家に初めて出会う旅であった。そしてカルチャルショックと呼んでもさしつかえないほど、強烈な印象を心に残す旅となった。

それはヨーロッパで感じた異質性ではなくて、ほとんど同じと言ってもよいほどの同質性を、そこに見出だしたからに他ならない。初めて見た慶州(キョンジュ)の風景を、その頃書いた本の中で、「疎林の山を背にして、霧雨の中に煙る集落の姿は、まさに天平時代の奈良盆地の風景を思わせた。そんな風景は今の人間なら誰も見たことがない空想の映像だけれども、昔実際に見て印象に残った風景にめぐりあったような親しさを感じた。」と書いている。

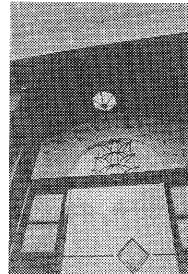
ソウルの秘苑(ピウォン)は日本の宮城にあたる。そこに演慶堂(ヨンギヨンダン)と呼ばれる宮殿がある。この建物は「韓国の桂離宮(ヤランチエ)」と呼びたいほどに美しく、また日本との同質性を強く感じさせる。絵は演慶堂の舍廊棟の南面。



# 住み継ぎ

日影良孝・高橋大助・加藤雅久・松岡智之

住み継ぎネットワーク



バスを降りると、冬の澄明な陽差しが人工都市を浮かび上がらせていた。街は乾いていた。私は立ち止って、街の景観をしばらく眺めていた。……巨大なシリコンみたいな街だ。街は、都市計画のミニチュア・モデルをそのまま拡大したような趣がある。バスの窓から眺められた沿道周辺の風景と同じように、地勢は起伏に乏しくどこまでも平坦だった。やはり想像していたように無味乾燥な街だ。そう思った。

※

通りにはよく剪定され、等間隔に植えられた同じ色形の街路樹が延々と続いている。路の脇にも人工のものらしい樹林があって、樹林の背後には、定規で引いたような直線的輪郭の建造物が連なっている。中央分離帯を挟む二本の通りには車が頻繁に行き交っていた。しかし舗道には遠くに無機的な点のように見える二つの人影があるばかりだ。私は歩きながらその遠くの人影のように徐々に情感を失っていくのを覚えていた。このように歩行者の姿が極端に少ない街をいつかどこかで歩いたことがあると思いながら、それがアメリカのシリコン・バレーの街であることに気がついた。シリコン・バレーの街とこの街にはいくつかの共通点があることにふと気がついた。新しい歴史のない人工的な街であること。単一な目的のもとに設計された街であること。都市とはまったく無縁な荒野に、ある日忽然と出来上がった街であること。過去を持たず、未来にのみベクトルを向けている街であること。そして人が歩いていないこと。人が歩いていないのは、多分それらの街が外に向かって閉ざされている街だからだ。人々が無目的に交流し合う契機がこの二つの街では必要とされていない。厚い壁に閉ざされた空間の中で、人々は日々何かの未来のための研究に半ば自足したかたちで黙々と没頭しているらしい。路はただ交通するための回路であるに過ぎない。回路には歩く愉しみがない。歩くほど退屈が増幅するだけだ。砂漠の歩行に似ている。無意味な歩行を避けて人々は車に幽閉される。

※

平坦な土地。幾何学的な曲線や直線。回路。回路の上をときたま移動している、ロボットのような小さな人形。人工樹。スマートド・ガラスを通して、影絵のように動く陰った冬の空。

※

いくら歩き続けても、同じ一点を歩いているような錯覚があった。景観が変わらないからだ。街はシャーレの中で培養した同じ形のように、透明な隔離の中で無機的な形状の単位を、増殖させながら、どこまでも続いている。五官に刺激のないまま、二時間ばかり歩いて退屈を覚えはじめたころ、遠くに「筑波大学」のサインが見えた。

藤原新也「乳の海」より（※は中略を示す）

## 住み継ぐということ

日影 良孝

### なつかしいもの

「古いもの」は素材も良いし、作り方も丁寧だし、デザインも良いし、時間の経過と共に味わいがでてくる。

「最近のもの」は素材は悪いし、作り方は雑だし、デザインは悪いし、時間と共に醜くなっていく。

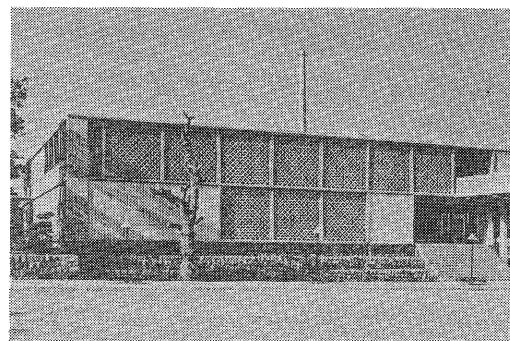
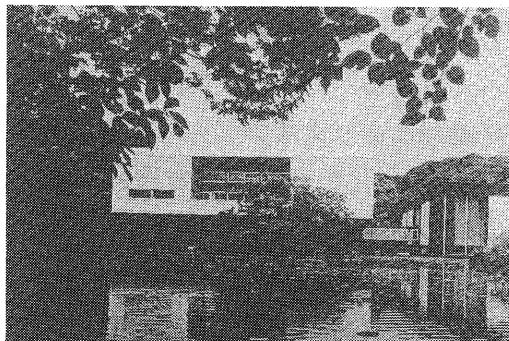
しかし「最近という時間」も50年も経てば「古いもの」と呼ばれ、醜悪な建て売り住宅群も、ありえない話であるが「かつての経済文化が生んだ貴重な？民家の集落」と呼ばれているかもしれない。

どんな家も例外なく、古くなればなるほど生活臭さや手垢が染み付き、それを人は味わいと呼ぶ。古い風景の中に入り込むと一時感傷にひたることができ、「古いものはいいものだ」と思わずつぶやいてしまう。

なつかしいものは、美しくみえてしまうものだ。だがこのあいまいな印象を強く持ち続けると「ノスタルジックと呼ばれるブラックホール」に全てが吸い込まれていく。時間はリアルに流れていることを実感しなくてはならない。

### 歴史的文脈と記憶の器

時間の流れを、堰止めることはできないから、歴史的文脈の上に常に立っていることを我々は認識する必要がある。認識を誤るから壊す必要が全くない神奈川県立図書館・音楽室や神奈川県立近代美術館を新しいものに建て替えようとする者が現れたりする。僕の地元に建つ大切な建築物である県立美術館は、鶴ヶ岡八幡宮境内の自然にみごとに調和し建っている。あの場所には、あれ以上のものはなく、あれ以外のものは考えることができない。



神奈川県立図書館・音楽室、神奈川県立近代美術館 共に住宅建築より複写

彼らは、時間軸を否定することによって何かを生もうとしているところがある。彼らは、過去から目をそむけようとしていると思えるほど、過去を一気に水に流して全面建て替えに走っている。彼らは、金を生むために今ある状況をゼロに戻さなければならないという恐怖感に追われ、あせっているように見える。彼らは、なんでもゼロに戻そうとする、悪い意味での清らかさを持っている。彼らは、建物も都市も信ぜず、ただ土地だけを永続的存在と考えている。彼らは、町なみや建物の「記憶の器」であるとは微塵も思っていない。

### ※

このまま近過去までも含めた過去の建築物をないがしろにしていくと、20世紀末の現在を、振り返るための具体的な建造物（物証）は永久に失われる事になるだろう。今、身近なところにも目を向けていく必要がある。それは都市部に限ったことではなく農村も同じである。今まで継続されてきた生活軸を断ち切ってはならない。このままでは歴史に空白ができてしまうだろう。

## 未来

これから訪れる未来は、どのようなものかは確定できない。しかし避けて通ることのできない問題は確実に準備されている。

高齢化の進展、地球環境の悪化、人口増大と食料生産の停滞、文化的宗教的対立の頻発、南北格差の増大……どれも難しい問題ばかりだ。

そして戦後50年の節目を迎える、これから50年つまり戦後100年である2045年まで社会・家庭生活・経済・産業あらゆるもののが急速に変化していくことも容易に想像できる。例えば情報ハイウェー、インターネット。これらの整備が進むにつれ、情報ネットワークが世界を覆い、一元的な力で世界は統一され、多様性が失われていくかもしれない。

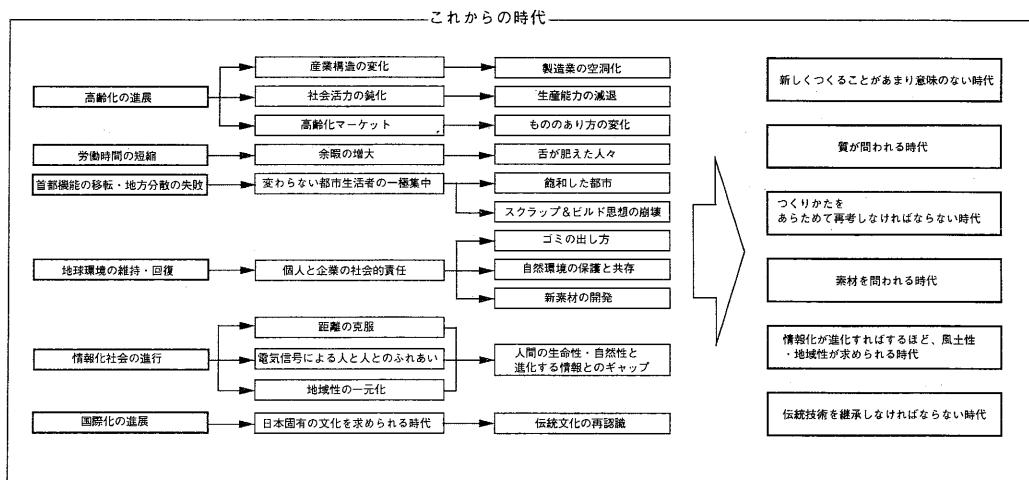
我々の身体が持っている生命性、自然性がいったいどこまでこれらに変えられてしまうのだろうかと我々は不安に思ったりするが、幸い人間は生物だから無機質な「半導体」に変化していくことは絶対にありえない（思考が無機質になっていくことはありえるが…）。世の中の無機質化が進行し、有機的なものが枯渇してくると、人間はストレスを感じ始め、有機的なものを摂取し、有機的なものに包まれようとしてくる。

つまり無機質化の進行に反して、人間の基本的な生活文化である衣食住は有機質化していくと僕は考えている。

## 建築や都市基盤の質

欧米先進諸国の建築・都市基盤は19世紀に整備されたものが多く、20世紀の現在それらの維持管理に困難を極めていると聞いた。日本も現在の都市基盤が将来の都市生活に適合しなくなり、いきなり白紙に戻し新たに作り直すことは物理的にコスト的に不可能で、新規建設よりも現状維持型のストックの時代が来ると予想されている。

とすれば今の段階で、将来のために建物の質を考慮しておかなければならぬ。要するに質の向上が必要で、建築的な耐久性ばかりでなく技術の保存と再生も要求される。その結果、風土・自然環境的側面から木造建築の重要性が見直され、それにともなう木材資源の再生とバランスが求められてくることになるだろう。



## 生活史

歴史は、ただ漠然と作られ蓄積されていくものではなく、人々の生活史と共にあるから、建物を維持ストックしていくためには、時代区分や家の豪華さに価値判断を置くようなやりかた（対象吟味型の手法）には問題がある。

昭和に建てられた民家も、都市に残る日本家屋も、木造の借家も、横丁の銭湯も、その家に蓄積された記憶の量を想うと残しておくべきではないかと思う。生活史的側面からアプローチしていくけば、建物の再生も、もっと違った方法が見つかる筈だ。

例えば日本の民家を継承していく手法には以下の4通りの手法が考えられるが

### 民家を継承していく手法

1. 文化財的凍結型
2. 生活文化継承型
3. 骨董価値重視型
4. 現代民家創造型（再生するのではなく新しく建てる手法）

2の生活文化継承型と4の現代民家創造型が、これから民家を継承する上で重要ではないかと考えている。

生活史を継承していくために家やまちを継承していくというスタンス……それを私達は「住み継ぎ」と呼ぶ。

何から何まで残せばいいのかと反論されそうだが、それぐらい思っていないと社会の動きに抵抗できないだろう。しかし社会に抵抗し喧嘩をし、批判ばかりしていても芸がないわけで、「住み継ぎ」が閉鎖的な概念にならないためにも、どのような方法で、彼らと融合したらしいか、もしくは融合できるかを考えなくてはならない。

### 「住み継ぎ」

そして住み継ぎには以下の2つの考え方がある。

#### 過去を住み継ぐ 住み継げる未来をつくる

この2つは切り離されたものではなく連続したものであり、家に限って言えば、新しくつくるよりも、今ここにある家を生かしながら創造したほうが良く、新しくつくるなければならない時がもしあったら、かつての民家のように長く残り、移築再生ができるような家づくりが必要である。

そのためには、骨組みが重要であり、自由な間取りも必要であり、人々から愛される家でなくてはならない。素材も本物である必要があろうし、普遍的な美を備えていなくてはならない。そして技術の継承も必要であろう。

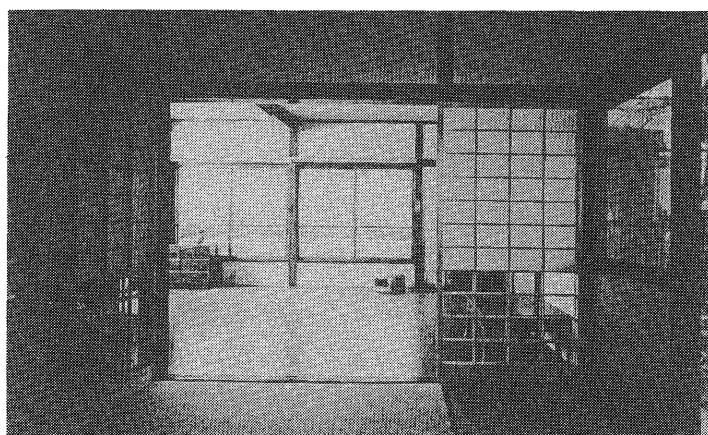
次に住み継いでいくうえで大切になってくるものを、考えると以下のような事が上げられる。

### 住み継いでいくうえで大切なこと

人	住まい手 (住み継ぐ人、生活文化を継承する人)
人	作り手 (職人や設計者、そのネットワーク)
対象	住み継いでいきたくなる家や町並み
技術	伝統的技術の保存と継承
耐久性	永く残る工法、住み継げる工法
素材	素材や材料 (住み継げる材料、風土にあった材料を継続的に入手できるシステム)
金	コストバランス (住み継ぐ行為を特定の階層にしない努力、伝統技術に対しての適切な報酬)
融合	現代生活と住み継ぐ対象との融合



梅ヶ丘のアパート改裝／住み継ぎネットワーク



杉並のアパート改裝（画家と写真家の家）／日影良孝

建築的側面からアプローチすれば民家の再生は、とてもわかりやすい「住み継ぎ」であるが、「住み継ぎ」は「器」だけの継承を意味するものではけっしてない。

衣食住全般を示し、自然環境までも含むものであり、都市であろうが農村であろうがその境界はない。「住み継ぐ」という言葉の中に、あらゆるもの可能性が含んでいるのではないかと思っている。だからここでは「住み継ぎ」を具体的に定義することを避けるし、その力は僕にはない。

ただ最近、住み継ぎは時間を意味するものではないかとなんとなくわかつてきた気がする。藤原新也が言うように、まちも家もシャーレの中で、均質に培養できるものではけしてないわけだから。

ひかげ よしたか